

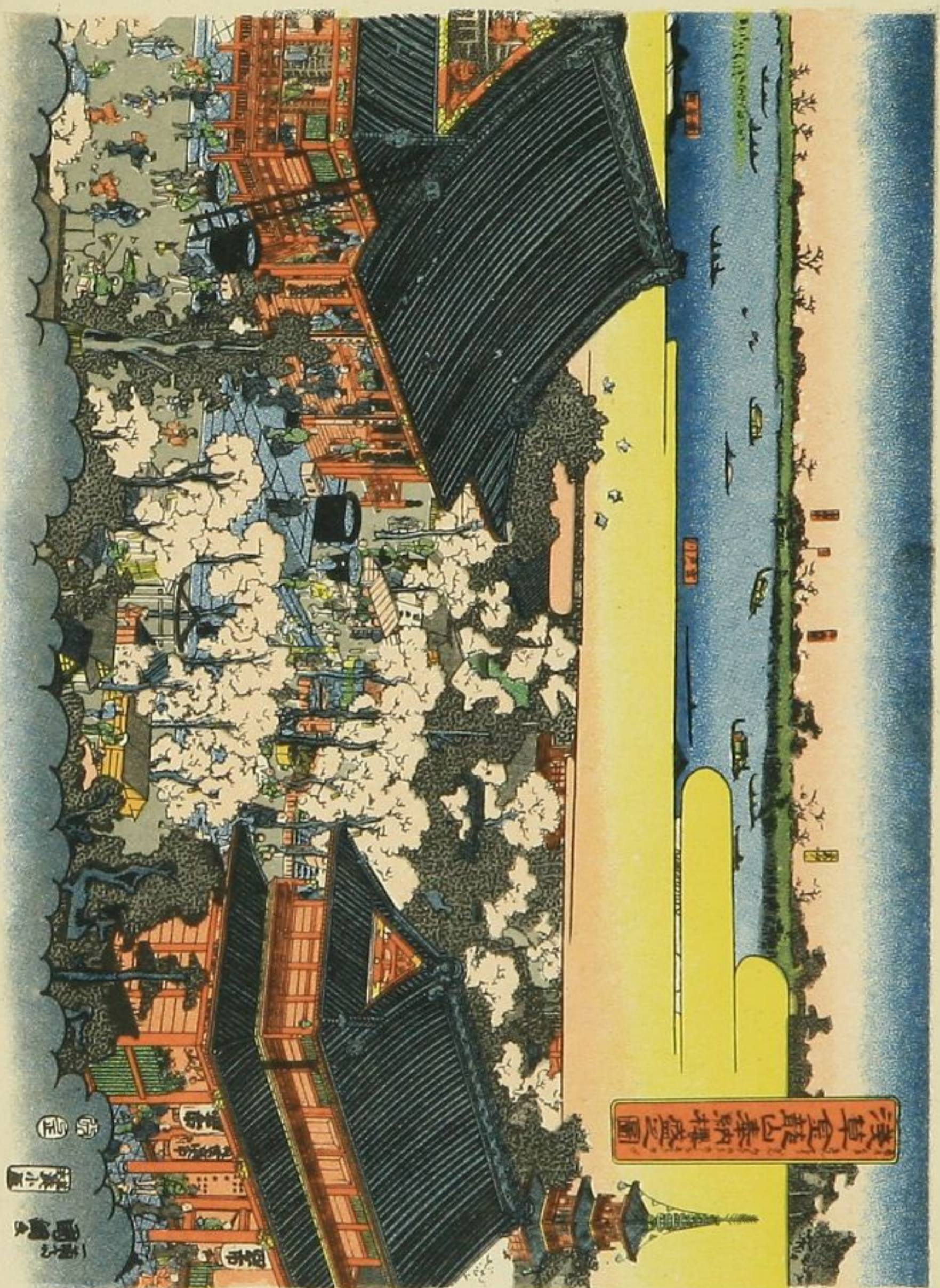
竹頭木屑錄

昭和四年五月上浣起筆

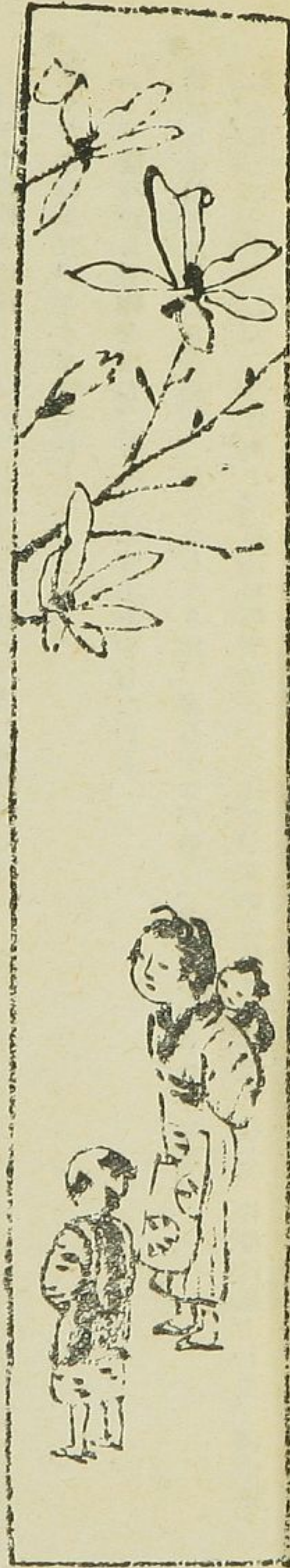
田

特別
44
1919
412





版年四政安 (畫綱圖) 圖之櫻納奉山龍金草淺



良寛と子守 (舞踊劇)

逍遙作

越後の國、西蒲原郡の或る村はつれの地藏堂の前。時は四月ごろ。上手寄に満開の櫻の立木。背景は遠近の山々田畑。(背景も舞臺装置も成るべく簡素に、寫實的でないのがよい)。

こゝに十五六歳の村の小娘、名はおよし、赤んぼをおぶひ、十一二歳から八九歳までの女の子四人と「子買をく」の遊戯をしてゐる。十一二歳の者も、二人だけは赤んぼをおぶつてゐる。

幕があかぬうちに、山臺の常盤津連中は「子買をく」の童謡を地に取りて語りはじめる。ト「二もんめくれる

の道邊近江中央の論に載する不る日敷
僕も雲つとこゝの牧場の

五月三日誌

藤岡

「やアだ(三もんめ「やアだ」の邊で幕をあける。トすぐに例の追ひ廻しになり、子役らは舞臺を二三度ばたきと足音をさせて駆け廻る。トおよしが物に蹴つまづいた心でころぶのをキツカケに、およしの後ろに附いてゐた子役ら一同將棋だふしに倒れる。途端に三人の赤んぼがけた、ましく哭声出す。(赤子笛)。その哭声をキツカケに「たがよ〜」になる。

コドモウタ
「子を買を、子買を(どの子かほしい「ちよいと見て此子(よく見て「この子(何買うて養の(魚と饅頭とおこしの米よ

「そりや蟲の大毒(一もんめくれる「やアだ(二もんめくれる「やアだ(三もんめ「やアだ。

子役皆々
「アイタ、、、、!

赤子
「オギヤア〜〜!

常盤津
「あいたち轉んで、膝ツかぶ、チ、チットモソットモ大事なえ。

およし
「たがよ〜!

皆々
「たがよ〜!

ト子役四人は泣く子をあやししながら、別れ〜に奥の方へ退り、およしも同じく赤子をあやししながら前へ出る。

常
「泣くなよい子だ、こんな物くりよに。

ト懐ろから手鞠を出し、それを見せてあやししながら

常
「暮れるまでにはまだ日が高い、ねんねしなされ、寝る子は可愛い。(泣くを慰さの子守唄。

子モリウタ
「ねんねころ、や、ねんころにやア、ねんねの守はどこへ往た、あの山越えて佐渡へ往た、佐渡は四十五里、波の路。

オケガブ
「沖のかいり火涼しくふけてよ、夢を見るよな佐渡が島(雪の新潟、ふいきて暮れてよ、佐渡は寝たかよ灯も見えぬ。

ト此間よろしく振ありて

常
「ねたかよ背の赤っ子も。(さアこれからはみんなして、

ト奥の子役四人をさし招くこなしありて

「木やり音頭や盆の唄(「ア、イー、雪になりたや駒ヶ嶽の雪に、ア、イー、とけて流れて、ソーリヤ、新潟女郎衆の化粧水、

ヨイヤサ〜(「ア、イー、竿に瓢箪秋の風が吹けば、ア、イー、ころびころんで、ソーリヤ、蔓めがくる〜搦みつく、ヨ

イヤサ〜(長調盆ウタ
「石の地藏さん頭が丸い、鴉とまれば投げ島田(早く大きく成れ〜女子、なれば殿さへ嫁にやる(盆だてか

んに、茄子の皮の雑炊だ、あんまり盛りつけられて、鼻の頂上焼いたとや。

踊りをさめると

およし
「ナウおでこさ、きんによも一昨日も良寛さまア來なさらなかつたがの、どうしなかつたかなう?

甲
「けふは必定來なさらうすけ、來なかつたら、また一貫ていはうなう。

乙
「あ、良寛さまア、おらが二貫てえと、こんけえに反ッ返りなさるがんだね。

丙
「はいから、三貫てえと、又こんけえに。

丁
「四貫てえと、又こんがに。

およし
「だら、けふはでツかい聲で五貫てつて見なされ、ぶッ倒れさつしやるかもしれんねえすけで。

皆々
「ほんだ。それがえい、それがえい。

およし だども、まだよッぽど間があるだらうすけ、あすこでおはぢきサして待つてるようて。さアみんな、來なされ〜。
と一同地藏堂の縁まで退り、二人ほどは縁にあがりて坐り、他の三人は縁に寄りそうて、見物へは背を向けて、おはぢきをはじめぬ。

ト床の常盤津のオキになる。

常 山かけの岩間を傳ふ苦清水、かすかにわれは墨染の、やぶれ衣は雲煙り、風に亂る、耳が根の、おどろ白髪は陽炎や、かぎりある世をいざしばし、生酔ひ心地、舞ひ心地、うかれあるきの良寛坊。

ト良寛、六十七八歳、裾みじかに著た鼠色の古ぬのこ、處々やぶれてよれ〜になつた墨染の僧衣、素足に草鞋(脚絆はなし)。頭は禿けて、白髪は薄く、鬢は耳の少し上から、後ろは頸へ掛けて延び放題。胸元には手鞠其他の必要品をいれた頭陀袋を下け、つい今がた、或る托鉢先きで馳走になつた酒機嫌、ほろ酔ひの心、極きやしやな(四尺五寸ぐらゐの)錫杖に途中で摘み集めた葦や蒲公英などを一束にして結へ附けてかつぎ、うかれて出る。

常 雨のふる日にやみじめなおらも、暗れてうらく〜初春がすみ、立つたりや居ても、ねて見ても、しづ心なの、葉を摘もか、水を汲まうか、歌よもか、いつそいつもの子供らと、葦すまうやはぢきくら、てんとおもしろてん鞠つかか、ひふみよいむな、やツとんとん、子らが歌へばおらが突く、おらが歌へば子どもらが、やツとん、やツとん、こゝのとを、十とをさめて又もとへ、戻るか往くか白眞弓、春に酔うてぞ來りける。

ト本舞臺へ來る。この途端に、およしは地藏堂を離れる。

およし ほんだ。良寛さまだ〜。

ト皆々ばら〜と前へ出て

甲 良寛さま、一貫!

トこれにて良寛いかにもびっくりしたらしく反り返る。

乙 良寛さま、二貫!

ト良寛前よりも大きく反る。

丙 良寛さま、三貫!

ト良寛又大きく反る。

丁 良寛さま、四貫!

ト良寛又反る。

五人しよに 良寛さま、五貫!!

トこれにて良寛更に大きく反るはずみに仰向けに倒れて、かついでゐた錫杖をはうり出す。

皆々 わアい〜! は、は、は、は!

ト手を叩きて笑ひ囃しながら、ト、寄りたかりて抱き起す。

良 やれ〜! おらをえらい目にあはせるなう。

トいひながら、しづかに塵を拂ひつゝ、起きあがる。

良寛さま、その杖の棒の花ア何しにだかえ?

オ、こりやいつもん通り、おみたちと草相撲せうと思つてなう、これ、こんけえに摘んで来たがな。

良寛さま、何しにけふは...

あのいつもの鉢の子を...

なんしに持つて...

ござらつしやらなかつたかの?

ト良寛はじめて鐵鉢を忘れて来たのに心附いて、驚く思入れ。

ホー！ 鉢の子！

トうろたへるこなし。

あの鉢の子を、いつ、どこへ...

おきても、寐ても、何として、忘らりよものか、はしきやし、あの鉢の子は思ひ出の、いつも崎なるふる里を、立出でしより五十あまり、幾はる秋の朝ゆふべ、かひなに掛けて、手に載せて、眞しら玉かや、まな子かや、また無き友ともいとをしみ、手馴れしものを、いつ、どこで、憂き別れてふうつし世の、あぢき歎きをけふぞ身に、思ひしら髪わが心、かき亂れては立つらくの、立つても居ても、せんすべも、なみだ片手にさがそにも、あて嬭竹や細杖を、たゞ一筋の力草。

ト文句の通り良寛なげく振よろしくある。子供らもつい同感して氣の毒がる。

「あら、良寛さまがベソかいてござるだ。」

「ほんに泣いてござる。なア、良寛さま、泣かッしやるなく。あけんなものだアれも持つてく管なえすけイ、今にどッこぞで目ッかるだで、泣かッしやるなてば。」

良寛さま、機嫌なほさッしやれ。

「いつものやうにてん鞠でも突かッしやれ。」

「ほんにそれが一ちえ、わ。」

「良寛さま...

「てん鞠突かう、てん鞠突かう。」

このうちに良寛よろしく思入れありて

「ほんにさうぢやなう。負うた子に淺瀬とは此事ぢや。南無阿みだぶ、南無阿みだぶ！ さア、突かうてや、突かうてや。」

「うなづき、うなぢの頭陀の紐、とく／＼手に手、鞠しらべ。」

ト文句の通り、良寛は頭陀袋より手製の美しき鞠を取り出す。同時に子供らもめい／＼鞠を取り出すことありて

「さア、え、かえ？ けふは負けたもんには罰イあてるてがんね。」

「罰あてる？ で、若しわしが負けたら？」

「いつもん通り、何かおもしろえ話イして...

「くらッしやい〜。」

このうちに良寛よろしく思入れありて

「ほんにさうぢやなう。負うた子に淺瀬とは此事ぢや。南無阿みだぶ、南無阿みだぶ！ さア、突かうてや、突かうてや。」

「うなづき、うなぢの頭陀の紐、とく／＼手に手、鞠しらべ。」

ト文句の通り、良寛は頭陀袋より手製の美しき鞠を取り出す。同時に子供らもめい／＼鞠を取り出すことありて

「さア、え、かえ？ けふは負けたもんには罰イあてるてがんね。」

「罰あてる？ で、若しわしが負けたら？」

「いつもん通り、何かおもしろえ話イして...

「くらッしやい〜。」

良 (あいよ、あいよ。だども、若しおみたちが負けたら?)

およし (はしたらなア、どんけん事でも、ナア……)

ト皆々を見返る。ト皆々聲を揃へて

皆々 (爲るがんね。)

良 (よし)。さうきまつたら、さア、てん鞠の、はじまり。

善導寺の鴉、お賽銭ぬすんで、田端へ寄つて、肴買つてたべて、喉に骨突き立つた。お千水くりよ、お萬水くりよ。お千もやアだ、お萬もやアだ。ほうろく鍋で、小石を積んで、ホ、ウあぶないところ。

およしをはじめ五人を相手に良寛鞠を突く。「石なを積んで」といふ文句の切れ目で良寛鞠を取り落す。

およし (ホウラ！ 落ちた。良寛さまの負けだ。)

皆々 (罰イあてれ、罰イあてれ！)

およし (さア)、話しして……)

皆々 (くらッしゃい、くらッしゃい！)

良 (なぢよしよもなんない！ 話しましよ)。)

ト手鞠ひろうて、身づくろひ。

ト文句の通り、ちよつと支度することありて

(むかし)の物語、釋迦無二如來のいでまし、天笠の山奥に、仲よう暮らす猿、狐、うさぎの前世は人の身も、剛愎非道の報いにて、今畜生のあさましさ、悔みななしみ、身を責めて、善根積もる雪の夜半、うゑこゝえたる乞食の老爺、目はかすみ、腰は弓状、竹の杖、つく息もたえなく、山路を辿りくるしげに、喃、物たべと言ひかけて、倒れかゝるを抱き起し、猿と狐は介抱を、うさぎに頼み山と川、猿は木の實を、狐は魚、とりぐに食ませ、いたはれば、やうくに息いでて、あら、有りがたのみめぐみや、この上の情けには、あた、めてたべ此肌と、言葉の下に狐と猿、枯れ枝あつめ、打火して、はやぼうくと燃ゆる火を、うさぎつくくうちながめ、あら、はづかしや、われのみは、何ひとつの功德もせず、冥加のほどもおそろし、せめて炙り肴まらせん、はやめせ、と言ひもあへず、炎の中に躍り入り、生きながら燻き兎とぞなりにける(こじぎの姿忽然と御佛と拜まれたまひ、美妙のおん聲ほがらかに、身を殺しても他を救ふ、これこそよなき功德ぞと、うさぎの骸を掻きいだき、虚空はるかに上りまし、月の宮にぞをさめたまふ(今も見るなる兎の影の、由來は斯くぞ子供たち、月の鏡に末の世永く、寫す情けの鑑、小うさぎ。)

ト文句の通り、物語の振よろしくある。此話のうちに、子守ら感動したる思入れ、一ところに居すくまりて、しばらく、物語が濟んでも尙ほ泣いてゐる。良寛それを見て

良 (ホイ、どうしたのぢや? こんどはおみたちがベソかくか? どうしたのぢや、どうしたのぢや?)

およし (おらアそのうさぎの焼け死んだんが、もけッけなうて、氣の毒で……)

甲 (おらも、そのうさぎがかはゆさうで、かはゆさうで……)

ト皆々泣く。

良 (感心々々！ よう兎をば氣の毒がりやる。それが情けといふもんぢや。慈悲といふもんぢや。それでこそ眞の人に

なれるてや。だどもナウ、もう機嫌をなほいて、さア〜、もう一遍、てん鞠、てん鞠！

トこれにて子供ら又立ちあがる。

良 〔さア、こんどはわしとおよしさと、二人の勝負ぢやぞや。〕

ト次ぎの手鞠唄の最初の一句だけは、良寛みづから歌ひつゝ、突きはじめ。

〔唄〕おらが婆さは焼いた餅が好きで、隣へよばれて、四十八たべた。〔一つ残して袂へ入れて…〕

ト鞠をホーンと突いておよしへ渡す、およしそれを

〔馬に乗るとてコロ〜と落し…〕

ト歌ひつゝ、受けようとするはずみに「コロ〜…」と歌ひかけて落す。

良 〔そこを落した！ 罰だぞよ〜。〕

〔皆々 さうだ〜。〕

甲 〔良寛さま、罰イなによ…〕

〔皆々 あてさッしやるの？〕

良 〔何がよからうかなう？ やッぱり、いつもの出雲崎の船唄がえいなう。〕

乙 〔サア〜、およしさ…〕

丙 〔いつもの出雲崎を…〕

〔皆々 うたはッしやれ、うたはッしやれ！〕

トこれにておよし次ぎの船唄につれてよろしく振。

〔フナウタ〕 いつも崎の羽黒町で、その名も高いお茶屋の娘、髪は鳴田で黄楊の櫛、著物は薩摩の紺がすり、帯は筑前上博多、白足

袋はいて、下駄はいて、さらしの手拭ひ肩に掛け、小田原提灯手にさけて、姐さん、どこへ、と問うたれば、追分け習ひ

のその戻り、御所望ならば謠ひましよ。〔オヒワケ〕 今までは、それと知らずに浮氣もしたが、ぬしと定まりや、辛抱する。

良 〔やんや〜！ 面白かつた〜。〕

〔およし〕 その代り、今度はナウ、良寛さまを鬼にして、目かくし鬼をしようて。さ、良寛さま、これを結ッ付けさッしやい。

とおよしはじめ子供ら寄りたかりて、手拭ひにて良寛の目かくしをする。

良 〔これはまた迷惑な！〕

目かくしを式の如くにしてしまふと、一同ばら〜と四方へ散つて

甲 〔良寛さまが鬼だ！〕

乙 〔良寛さまが鬼だ！〕

〔常〕 目のなえ鬼さ、こつちさござれ、手の鳴るはうへ、とつと、ござれ、手の鳴るはうへ。

此文句二度繰り返す。その間に、二人三人づゝ、舞臺を横切つて、二三度上下へ入れかはる。其都度良寛も追うて廻る

こと。

ト暮れ六つの鐘。風の音。花がはら〜と散りかゝる。櫻の梢に七日ごろの朧月が現れる。

二度目の文句のカ、リで、およしは他の子役四人へ何か耳打することありて、とつと、ござれ、手の鳴るはうへ！

で、わざとすつと上手まで走つていつて、二三人で大きく手を鳴らし、すぐまた抜き足して下手へ戻つて来て、うなづきあひ、次ぎの文句のカ、リで花道へ逃げてゆく。

〔暮れすとも、よけき春日もたそがれて、梢にいつか七日月、さしあし抜きあし、小ベツちよども、折からこ、へ野良がへり、家路へ急ぐ村男、口には煙管、くはを肩、駈けゆく姿、けけん顔、見返りく、あゆみくる、出あひがしらに良寛坊。〕

ト村男甚六、四十歳ぐらゐる、文句の通り、野良がへりの打扮、頬かぶり、くはへ煙管、蹴をかつぎ、花道にて子供らと摺れちがひ、不審さうに其うしろ影を見送りつ、本舞臺へ来る。ト

〔そらこそつかまへたぞよ。〕

トだしぬけに甚六をつかまへる。甚六は驚いて

〔や！ お前さまは！ あれ！ 良寛さまでなえかの？〕

トこれにて良寛手拭ひをはづすこと。

〔ま、お前さま、なんしてござらっしゃるだか？〕

〔お！ さういはいはっしゃるは甚六さか？ わしは今子供たちと目かくし鬼をしとるところぢや。〕

〔はれ！ 子供らはもうとうにいつてしまひましたてがんね。〕

〔ホー！〕

〔時に、良寛さま、これさ若しやお前さまがんぢやなえかの？〕

ト裏ろから観鉢を出して見せること。良寛見て、驚く。〔さういはいはっしゃるは甚六さか？〕

〔あら、嬉し、あら、かたじけな、み佛のかげかや、神の冥助かや、夢ではないか、現かや 今は世にないかなし子が、生き返つたら親心、かうもあるかや千よろづの、玉にも金にも代へられぬ、おらが獨り子、いとし鉢の子。〕

ト文句の通りよろしくありて

〔どうしてこれをおぬしさが？〕

〔さればなう……〕

〔長い日もはや暮れかゝる山畑の、仕事しまうて歸り路、董、たんぼ、すかんぼう、ぼんやり踏み出す爪先きに、おつとどツこい、牛の糞、かと思つたら、ころくく、さては天からお授けの、黒い玉でもあらうかと、拾うて見たれば

〔これだ。お前さまがいつも持つてござらっしゃるのらしえすけ、拾うて來ましたい。〕

〔わたせば三度おしいたいき〕

ト良寛鉢を何度となく押しいたきて

〔あら、有りがたの佛菩薩、われらが菩薩、人の世の日の菩薩もぬしたちの、粒々辛苦になりわひは、けにこそ國のおんたから、南無阿彌陀佛、阿彌陀佛、冥加あらせたまへやと、をろがむ聖者ぞたふとけれ。〕

ト良寛うやくしく合掌し、膝まづきて甚六を拜む。甚六あきれて、會釋に困るをかしみよろしく。また風の音。櫻が少し散りかゝる。どこかで泉の啼く聲。

幕。

附 言

良寛研究家の多い現代には餘計なことやうだが、全く不案内な讀者もあらうと思ふから、曲中に引用した句意の出所を、引用順に左に列記しておく。

○山かけの岩間を傳ふ苦水のかすかにわれは住みわたるかも。

○頭髮蓬々耳卓朔、衲衣半破若雲煙、半醉半醒歸來道、兒童相擁後與前。

○風は清し月はさやけしいざ共に踊り明さむ老のなごりに。

○いざ歌へわれ立舞はむぬば玉のこよひの月にいねらるべしや。

○も、どりの木つたひて啼くけふしもぞさらにや飲まむ一つきの酒。

○行々投田舎、正是桑榆時、鳥雀聚竹林、啾々相率飛、老農擁鋤歸、見我如舊知、喚婦漉濁酒、摘蔬以供之、相對言更酌、談笑一何奇、陶然共一醉、不知是與非。

○雨のふる日は哀れなり良寛坊。

○わが宿の軒端に春の立ちしより心は野邊にありにけるかな。

○飯乞ふとわが來しかども春の野にすみれ摘みつ、時を經にけり。

○柴やこらむ清水や汲まむ菜や摘まむ時雨のあめの降らぬ間に。

○歌やよまむ手毬やつかむ野にや出む心ひとつを定めかねつとも。

○地奥記童開百草、開去開來專風流、日暮寒々人歸後、一輪明月素素秋。

くひふみよいむな汝がつけばあは歌ひあがつけば汝は歌ひ突きてうたひて霞立つ長き春日をくらしつるかも。

霞立つ長き春日を子供らと手まりつきつ、けふもくらしつ。

○つきて見よ一二三四五六七八九の十、十をさめて又はじまるを。

○日々日々又日々、同伴兒童送此身、袖裏毬子兩三箇、無能飽醉太平春。

○鉢の子は、愛しきものかも敷妙の、家出せしよりあしたには、腕にかけて夕べには、手上に乘せて新玉の、年の尾長く持たりしを、けふ餘所に、忘れて來れば立つらくの、たつきも知らず、居るらくの術をも知らに、刈菰の思ひ亂れて夕づ、の、かゆきか、ゆき、谷くいの、向伏すきはみ、天地のよりあひの限り、杖つきも、突かすもゆきてとめなむと、思ひし時に、鉢の子は、こゝにありとてわが許に、人は持て來ぬ、いかなるや人にませかも、千早ふる神の、りかも、ぬば玉の夜の夢かも、嬉しくも持てくるものかよろしなへ、持てくるものかその鉢の子を。

みちのべの董つみつ、鉢の子を忘れてぞ來しその鉢の子を。

○天雲のむか伏すきはみ、谷くいのさ渡る底ひ、國はしもさはにあれども、人はしもあまたあれども御佛の、あれます國のあきかたの、其いにしへの事なりき、猿と兎と狐とが、ことをかはしてあしたには、野山に遊び夕べには、林に歸りかくしつ、年を經ぬれば久方の、天のみことの聞こしめし、いつはりまこと知らさむと、旅人となりて足檜木の、山ゆき野ゆき菜摘みゆき、食し物あらば賜へとて、尾花折り伏せいこひしに、猿は林のほつえより、木の實を摘みてまるらせり、狐は梁のあたりより、いを、くはへて來りたり、兎は野べを走れども何もえせずてありければ、いましは心ともなし、と戒めければはかなしや、兎うからをたまくらく、猿は柴を折りてよ、狐にはそれを焚きてたべまけのまにまになしつれば、ほのほに投けてあたら身を、旅人の牲となしにけり、旅人はそれを見るからに、しなひ

うらぶれ、こひ轉び、天を仰ぎてよ、と泣き、土に倒れてや、ありて、土うちた、き申すらく、いまし三人の友だちに、勝り劣りをいはねども、あれはおさぎをめぐしとて、もとの姿に身をなして、からをか、へて久方の、天津みそらをかきわけて、月の宮にぞはふりける、しかしよりして塚の木の、いやつぎくゝに語りつき、言ひつき來り瓢形の月のおさぎといふことは、それがもとにてありけりと、聞くわれさへに白妙の、衣の袖はしぼりて濡れぬ。

○子供らと手毬つきつ、此里に遊ぶ春日はくれすともよし。

○かぐはしき櫻の花の空に散る春の夕べはくれすもあらなむ。

○奉天の國者彼は連平中史の事をも見ればことある
が出来上つてからまゝの元を核入らと得るうら。偶に英
の國者が日録を形成りの日録に國者の後列を以て
其後に入ることあるつれを核入る。姉崎彼書
から未親せよとの事ありがあらはれ一説の核
分を得た。ロツリアエラーから字の解の四る書
思ふ存らぬ心つれよがあるからその規模は解さ
大で日延ほせしるは、志んひる。前而るは
高の定も出来まゝに奉天の傳記がある。此の
建物の中するの國者彼は必要ある事あるは後
傍かあるは勿論附帶して九十計りの研究を
し添つてある。云々又入るを先づ目と意へよの事

い度ろい石段は宛から大寺院があるから其の
を為す。その石段は人生大の記名してあるが
各段に心も多くの各段が靴が踏つけし登
る。いかに体もい換る氣あはした。彼書ありは
崎崎士も訪ふと先づ梅生(の)園を興てえ
た。彼書ありは事あるはとて且つ先後の不
名の所にあつた。崎士の名もあつた。一時百位
監禁のりる録ありを詳細する。か教わある
の心家のふと海と目之んで傍ふと語つたが
吾等も東内さん各書を一冊すると於に
一時河のつた。まゝくはあはのり斯くは
を要するのふも親族の大か思はう。書庫

八十五冊冊を容る一丈のものが出来てゐる。あかしこの
巻積の青庫は北大銀三の鉤り合のぬまの世
界各五の字でしるし物と納められたが改
一杯の字といふから、直ぐは換紙を要する。
勿論換紙の巻定ひあると交へて、青庫の中
に入つて見て感したことは、階段が互ひ重ひ
れり出来てゐて昇降するに便利である
この日本以外の青庫あるといふことはある。青庫
ハ勿論スティーレンが出来てゐるが、重量ある者
冊を入る所の「ローラー」が滑りてゐる者冊
の出納を滑かすし、お物の表紙と換せたりし
たる用表があつて日行を好んでゐる。閲覧

室の天井は早大の閲覧室のこゝろへ変へる
いの物走とまの蔵があつた。そして学生司
の閲覧室の書庫も早大の比較でも数
が少まい。保しとま代り究つて閲覧室が
あるのむし書庫の数の多むむ補はれる。自由
閲覧室といふのは北館の圖書を利用した
いびりト油心の如きを考へてある専用の
よむ自由こゝろ出しの出来さレフアレンス、ブ
ックが付くとんでゐる。教授用の閲覧室
もあつた。従つて閲覧室もあつた。指しを者
閲覧室もあつた。この赤白のよむ書庫が
日々受ける授業を更に完全な

**GENERAL DESCRIPTION
OF
THE BUILDING OF TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY LIBRARY.**

The library building is located in the central part on the west side of the University campus, and is the donation of Mr. John D. Rockefeller, Jr. The building work was started in January of 1926 and was completed by November of 1928.

The general plan of the building is as follows:

THE SCALE OF THE BUILDING:

1. Building area	3,875.8 square metre (1174.5 tsubo)
2. Floor area	17,143.5 " " (5195.0 " ")
a) Reading rooms, Studies etc.	2,640.0 " " (800.0 " ")
b) Stack rooms	3,118.5 " " (945.0 " ")
3. Height (from the ground to the parapet)	
a) Central part (5 stories)	23.482 metre (94 shaku)
b) Right and Left Wings (front part)	19.392 " (64 ")
c) Stack rooms	18.786 " (62 ")

STYLE:

The external feature is a modernized Gothic, and is similar both in colour and manner to those of the adjacent buildings already built.

PLANNING:

Through the main entrance is reached a spacious front hall which leads up by a grand stairway to the Delivery and Catalogue room on the main floor. On the opposite front of the Catalogue room there extends the Main reading room covering the entire front of the main floor which measures 1,030 square metre with a capacity of 500 seats.

The east wing of the main floor is designated for the Reserved books reading room; its first and second floors being allotted for the Studies, while on the west wing of the main floor there are the Special reading room and the Cataloguing room.

The Office rooms occupy the whole of the first floor and a part of the second floor on the west wing. The Periodical room occupies the right front and the Memorial room occupies the left front of the first floor, adjoining the main entrance.

The Special exhibition room occupies the front part of the mezzanine floor just above the main entrance.

The top floor contains the Seminar rooms on both wings, while its front part consists of the Free reading room and the Rest room.

The basement provides rooms for Newspaper stacks, Machinery, Disinfection, Photography, Bindery Unpacking, Storage and etc.

STACK ROOMS:

They occupy the central part of the building and are situated at the back side of the grand stairway and the Delivery room. They have two stories except that of the basement and each story above the ground is further divided into 3 stories by glass floor, totaling in all 7 stories, which cover an area of 3,119 square metre. In the basement there are several safe vaults for valuable books and other precious treasures.

All these stacks are made of steel, fixed to the steel upright frames. In the safe vaults there are arranged several movable shelves.

CONSTRUCTION IN GENERAL:

The construction of the building is of reinforced-concrete with steel frame. Walls, floors, roofs and stairways are also of reinforced-concrete, while sashes and doors generally are steel make.

VARIOUS EQUIPMENTS:

1. Heating Vacuum steam heating system.
2. Ventilation Temperature and humidity control system is operated in the Main reading room.
3. Hydrants on each floor several hydrants are attached beside many fire extinguishers.
4. Lifts
 - a. freight lifts are attached to the stack rooms and to some of the office rooms for delivery of books.
 - b. ordinary elevators are provided for the use of the guests (readers and officials), on both sides of the grand stairway.
5. Pneumatic tubes connect the stack rooms and the Delivery room to facilitate the prompt service of the book delivery.

ACCESSORY WORKS:

A fountain is constructed in front of the main entrance, and around it there stretches on both sides, green bed with trees. At the further ends of the green bed, there stand facing toward the fountain two pavillions; one on the extreme east and the other on the extreme west. One of them has the air sucking tower for the ventilating purpose, while the other has the water pumping room for the purpose of fire prevention.

DESIGNER, SUPERVISOR AND CONTRACTORS:

The building is designed and supervised by the Building Department of The Tokyo Imperial University the Library, and the work was undertaken by the Obayashi Gumi Inc., Mitsubishi Shoji Inc., Tokyo Kentsu Inc., Mitsui busan Inc., and eighty others.

東京帝國大學圖書館建築概要

本建築は東京帝國大學構内西側中央部に位し、ジョン・デ・ロック・フェラー・ジュニア氏より寄附せられたるものにして、大正十五年一月起工し昭和三年十一月竣功せり。建築概要左の如し。

一、建築の規模

建築面積	三八七五・八平方米 (一、一七四・五坪)
建築延面積	一七、一四三・五 〳 (五、一九五・〇坪)
閲覧室 研究室	二、六四〇・〇 〳 (八〇〇・〇坪)
書庫	三、一一八・五 〳 (九四五・〇坪)

軒高地盤より扶壁上端迄

中央五階の部	二八・四八二米 (九四尺)
正面両端部	一九・三九二 〳 (六四尺)
書庫	一八・七八六 〳 (六二尺)

一、様式

外壁には貼瓦及貼石を用ひ色彩及手法共近接せる既設建物と類似せる近世式とす。

一、平面計画

正面玄関を入れば大廣間あり、大階段に依り直ちに主階なる目録室及書籍貸出所に達す。目録室の前方建物の全幅に互り面積一〇三〇平方米を有し、約五百人を容るゝを得べき一般閲覧室あり、主階東翼は指定書閲覧室に充て西翼には特別閲覧室あり、東翼の第一階及第二階は研究室とす。

主階西翼には目録編纂室あり、其下部第二階の一部及第一階全翼は事務室とす。正面玄関の左右には新聞雑誌閲覧室及記念室、第二階玄関上部には特別陳列室を有す。

以上の外第四階には、其兩翼部に演習室正面に休憩室、自由閲覧室を有し、地階には新聞書庫、汽罐室、書籍消毒室、寫真室、製本室、荷解室、物置等を配置す。

一、書庫

書庫は全建物の中軸に位し廣間大階段及書籍貸出所の後方にあり、地階の外二階建にして、地上の各階は硝子床を以て更に之を三つの層に分ち合計七層とし、床面積三、一九九平方米を有す。尙地階には貴重書籍を入れるべき安全庫あり。

書架は總て鋼製とし、架構鐵柱に取付けたるものにして、安全庫内には置書架を配置す。

一、構造の概要

軸部は鐵骨、鐵筋コンクリート造とし、壁体、床、屋根、及階段等は鐵筋コンクリート造、建具は大体に於て鐵製とす。

一、諸設備

暖房は真空式蒸氣暖房装置を採り、一般閲覧室には温度及湿度を調整し得る換氣装置を設け、各階廊下に消火栓を置き書庫内及事務室の一部には書籍運搬用フリートを、正面兩側には客用昇降機を備へ、尙書籍貸出しに便する爲め真空式カード輸送管を以て貸出所と書庫とを連絡す。

一、附屬工作物

大玄関の前庭には噴水塔を有する貯水池を中心として植樹帯を設け、之を挟んで東西に相向ひて二棟の休憩室を配す。休憩室の一は換氣用の空氣吸入塔を有し、他は消火用の鑿井揚水唧筒室を有す。

一、設計監督者及請負者

本建築は東京帝國大學圖書館建築部の設計及監督に係り、請負者は株式会社大林組、三菱商事株式会社、東京建鐵株式会社、三井物産株式会社、外八十餘名なり

復旦の以る英名から字を来たつた古版珍書が
特に珍列せられてあつたのを認められた。日本の国書の
内では東漢度の條約原本があつた。この八雲
火の折、金産に入つてあつたのは、備矢を免
かんたのびある。外版の目録、最も珍しく見ること
ハ、この書の特長、他の一室に物に陳列され
た日先社復版の模写でもあつた。これら
この往年サンフランシスコの博覧会でも日本
の出品としてあつた。二十合一の模写としてあつたが
精巧目を認めるかすあつた。この模写の細部の印刷
珍書の類もびびり模写してあつた。この書
く感あつた。さうして大なる備本を占める書

の書つて珍列したことがあつた。彼らの書は、在外
國から字を来たつた。國書に若入の終、統延帖の如き
長い筋目、右側の筋目を果てしてあつた。こ
漸やくも合はぬが用画とせん。残るよめを教へて
そのまゝ尚ほ三ヶ年を考へてあつた。この書は
此の書も存してあつた。この書も存してあつた。可
自書もあるから、残りの書も存してあつた。この書
あることであつた。この書も存してあつた。この書
七新書の度と見下して彼書も存してあつた。この
五月二十日記。

兼し此ら二つ目には南すむてあさう。南時の三菱會
社の社より等級の政府の勅差判の階級に擬し
俸給平等較り多しに似つておれと思はん。自分
ハ乃ち奏任格にあつた。南時三菱の人材を得る
に汲りたるものにあつた。之れを優遇するに答かひ
かつた。為り主派の人材が集まつた。自分も
今のから考へると破格の特遇を以てと思ふが、
推荐者が山岡操氏があつた。為りあつた。あさう、
神氏の義見義我といひ三菱の内閣中の人
であつた。恐らく自分の入社も義直氏も
口を利いたであさう。都念のよかつた。今計
の部長が渡田政文といふ人だ。友人の山岡氏の

かゝる人であつた。亦社内は小川為政もめて統
計を以てことを擔任しておれ。今計部は五
十人位の社員がみればあさうが、實に自分の知りてお
つたものも一人であつた。自分の課は四五名
ばかりのみで帳簿を擔任しておれ。さうさうあ
る。深く、課長も自分のまう外人を船長と
して南時の船長はまう外人であつた。船の計
算者も元扱つたが、不慣れの子であるのが可う
まじつた。五十五名を以て入るやうな厄な計
算の配下の係りのが擔任してあさう。日本業界の
まじつた自分の仕合があつた。
入社の南時渡田部長は私を(四月七日)日を橋の

尾張屋(あるじの尾張屋)のあつた物地屋(振き)
三菱の沿革(と説き聞かせ仕事)が出来んが
毎月或回(り)も引上げ(り)るが三菱の主義(い)あるが
船路(せんろ)せよと云(い)ふん。其時(そのとき)亦(また)君(きみ)を今(いま)の運賃(えんちん)の深
く置(お)いての強(つよ)さ(を)こ(の)も任(まか)せ(り)て(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す
い。法(は)律(りつ)も一(いつ)つ(と)も(も)つ(と)元(もと)出(で)つ(と)て(は)事務(じむ)の全(ぜん)体(たい)は(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す
貫(ぬ)ら(ぬ)し(ぬ)とい(い)ふ(と)云(い)ふ(と)云(い)ふ(と)。此(こ)の(の)三(さん)菱(めい)今(いま)の(の)日(ひ)
本(ほん)橋(はし)の(の)第(だい)一(いつ)号(ごう)の(の)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。今(いま)の(の)建(た)築(ちく)
は(は)清(きよ)く(と)主(しゅ)流(りゅう)の(の)よ(よ)う(と)思(おも)ひ(ま)す。社(しゃ)長(ちやう)の(の)言(ごん)は(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す
七(しち)土(ど)倉(くら)の(の)前(まへ)の(の)三(さん)菱(めい)今(いま)の(の)日(ひ)私(し)事(じ)の(の)事(じ)
務(む)を(を)執(と)つ(と)て(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。退(たい)出(しゅ)の(の)時(とき)は(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す
帳(ちやう)簿(ぼ)を(を)各(かく)の(の)自(じ)身(しん)の(の)形(かたち)を(を)守(まも)り(ま)す。接(つ)接(つ)する(と)思(おも)ひ(ま)す。

(一)運(うん)の(の)始(は)まる(と)思(おも)ひ(ま)す。あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。重(じゆう)量(りやう)が(が)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す
ら(ら)お(お)高(たか)く(と)思(おも)ひ(ま)す。三(さん)菱(めい)今(いま)の(の)日(ひ)の(の)出(しゅ)の(の)
勢(せい)は(は)社(しゃ)内(ない)に(に)進(しん)む(と)思(おも)ひ(ま)す。を(を)以(も)つ(と)て(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。
毎(まい)日(に)出(しゅ)勤(きん)時(じ)の(の)早(はや)さ(を)競(けい)は(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。
の(の)い(い)ま(ま)く(と)思(おも)ひ(ま)す。夜(よ)か(か)の(の)け(け)さ(を)互(たが)い(に)出(しゅ)か(か)け(け)た(と)思(おも)ひ(ま)す。
社(しゃ)長(ちやう)と(と)各(かく)札(さ)を(を)掲(か)げ(け)る(と)思(おも)ひ(ま)す。所(ところ)が(が)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。社(しゃ)員(いん)全(ぜん)員(いん)
は(は)勤(きん)勤(きん)又(また)札(さ)を(を)掲(か)げ(け)た(と)思(おも)ひ(ま)す。ど(ど)ん(と)思(おも)ひ(ま)す。早(はや)く(と)思(おも)ひ(ま)す。出(しゅ)て(は)
一(いつ)番(ばん)を(を)か(か)ち(と)思(おも)ひ(ま)す。出(しゅ)て(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。今(いま)の(の)日(ひ)出(しゅ)る(と)思(おも)ひ(ま)す。
と(と)思(おも)ひ(ま)す。勤(きん)勤(きん)の(の)休(やす)み(を)も(も)つ(と)思(おも)ひ(ま)す。新(しん)報(ほう)を(を)紙(し)を(を)い(い)は(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。
頃(ころ)の(の)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。後(ご)に(に)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。今(いま)の(の)日(ひ)の(の)政(せい)略(りやく)を(を)い(い)は(は)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。
念(ねん)念(ねん)の(の)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。心(こころ)を(を)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。今(いま)の(の)日(ひ)出(しゅ)る(と)思(おも)ひ(ま)す。
社(しゃ)員(いん)同(どう)士(し)と(と)思(おも)ひ(ま)す。毎(まい)週(しゅう)の(の)あ(ら)う(と)思(おも)ひ(ま)す。月(げつ)給(きん)割(わり)

あつて、あの馬と出さうのだからつまらぬ級者が本意の
やうなものがあつた。三菱の花柳や割草店も
これよのむいどこい出うけも羽振りかよあつたの
全く三菱が一天地を他人と交はるやうな時がある
無つたのである。個々の腸腹を振らさういふこと
今世の二政政であるけれども、今世の心は
心のあつたものから、あつたものがあつた自分
政治の味があつたから、新らしく投考しつた
政治の味を聴く自分もやつたもよしあつ
たが、そんな許さうなうらから、自分の終りに
社に、松がその時、淡田部長があつたあつて、
理の難い、理の難い、理の難い、在田部長があつた

明治二十二年

自分は懇ごうは、今ありく辛抱まの洋の
もあつた、論せんが、その中身をかせす
退社し、その小の、氏の感傷を、彼つた後
もうつて、さういふこと、今も、羨望の、送つて、馬
鹿のこと、と、思ふ、せめて、二三年も、在社し、
自分を、益し、と、思ふ、と、悔い、ぬ、行、ぬ、
あつた、三菱の、社長、岩崎、氏、が、副社長、が
殆ど、死、な、つ、た、今世の、社、を、大、且、那、副社長、
も、荒、且、那、と、呼、ぶ、が、あ、つ、た、私、の、這、入、り、か、け、の、後、任、
か、私、の、机、の、ま、つ、ま、て、荒、且、那、の、お、見、え、と、云、ふ、の、心、
誰、の、の、つ、か、と、問、ひ、ぬ、と、同、僚、か、ら、い、天、に、い、
とも、あ、つ、た、社、長、や、副、社、長、の、姿、を、み、る、お、か、れ

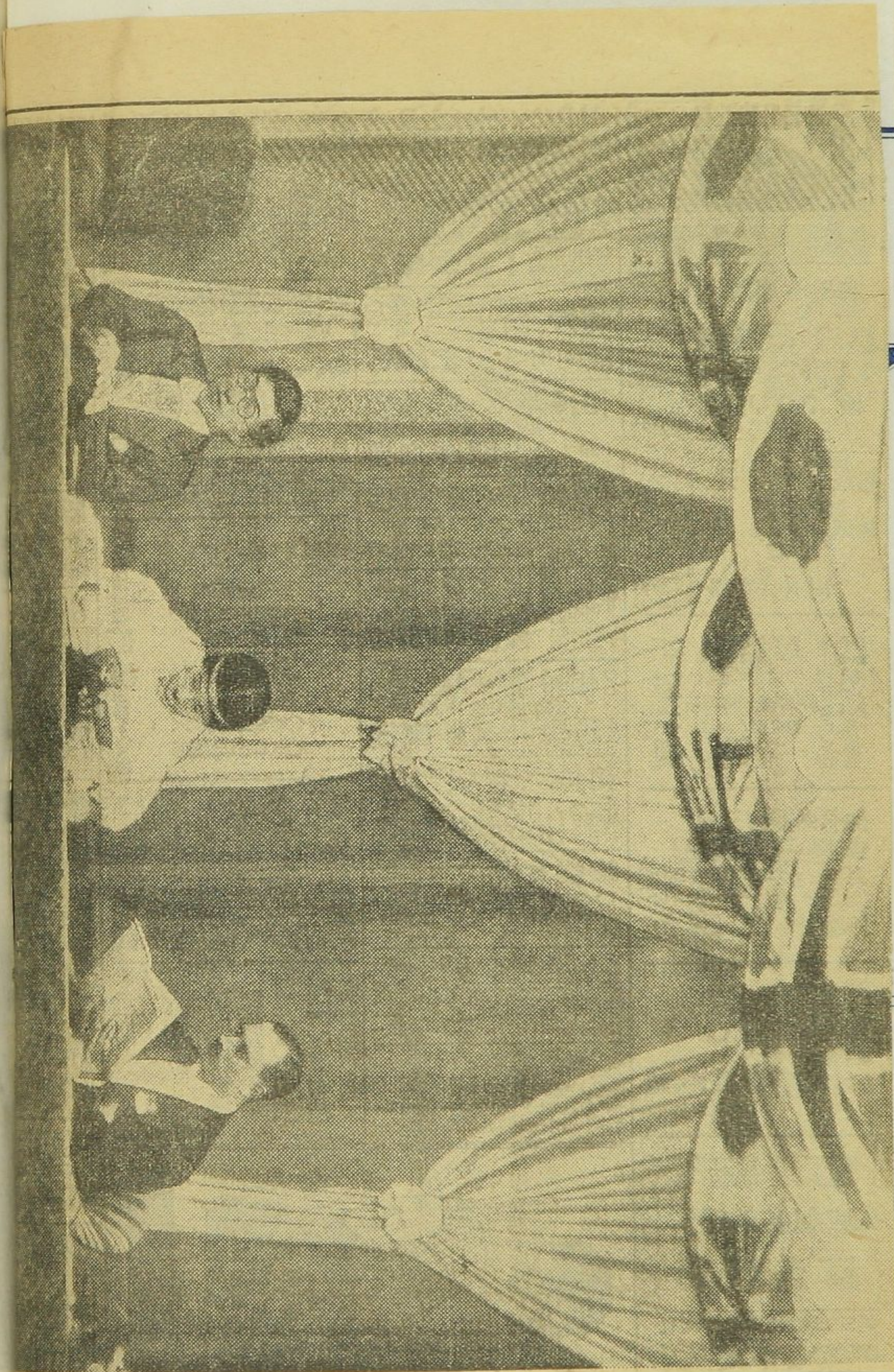
が、さういふ豪華のよきもあつた。会計部は岩崎家の
の私的会計方もあつた。岩崎家の豪華振りも
やへて見れしことがある。巻物は一冊で三十山乃
む五十山もあつたと云ふもなき。おらうくと云ふハ
ニヤブ、ドウ酒がこをさへもさういふと云ふんて魂
消れよ。だに女のあつた山、三菱の所有地がある
まが他人から侵さん、地境を決する為の技の流
老する。このころさういふ時、私の大子の先輩、
移者の地、おれ地、連大り、測量を
頼ん、
と云ふと僅う、十の間に二千円といふの、
我儘う、私を弱らせた。部、
と云ふと僅う、十の間に二千円といふの、
我儘う、私を弱らせた。部、

こと、報知の多寡を論、
ら、まゝさういふと云ふの、
腹之感して、此の臨的、
を解して三菱、
菱の南時の態、
るい、
三菱の在社時代、
橋元長、
其事、
皆、
十、
深と浦、

三菱の在社時代
橋元長
其事
皆
十
深と浦

はを埋めし計慮あり悲しく十年の後華海の感ありん北日十款分多るに四君子を描く法を教ゆ余例に依り十款と志きらる可法を交ゆ十款画家の流派と就て余意を琳派と稱し華山を椿山派とよぶの類例ありと誤り又鳥羽信元就て滑石の画を多しお論を云ふ事あり鳥羽信正の画は滑石と滑石なるあり可世は所謂滑石ありと傳ふる所の思ひごとく何人が名手の業をせん傳ふるの書とていひ傳ふるなりと云ふ牧溪梁楷を白毫の意ありよき人ありん何れか之れを誤りとするやと解せし余は余の日記に之れを君其甚く親左右然

記が漫くは画名を云ふの後世を云ふこと
を説く十款六一親本を傳日本^住人の生
活に甚く似たりあり日本人の家^住に樹木を
以つて心る鳥の住るといひ日本人は菜食を好
む鳥と喙を同する鳥の体は雞鴨を以てん
て日本人の似たり之れを又いふ日本人は野獸的
なり彼ん等の家土窟式なり彼等肉を以
てて休軀皮膚又獸類に似たりといふ一親
察するに余も日本花を好む鳥と一般なり
唯此鳥人の藝未熟を以て他より一書と云
ふと一失す北家刻畫は得る事とするよふ
アナゴの海魚と海魚の七人あり也



拜啓 弊社観劇會に御案内申上候處御多忙中
にも拘らず御光臨の榮を得候段欣快の至りに
存候就ては切符並に食券相添へ同封御送附申
上候間御落手被成下度候 敬具

尙當日は英國皇子グロスター公殿下の御觀劇も有之や
に聞及び候間御早々と御來場の程待上候

昭和四年五月六日

日清印刷株式會社

市島謙吉

光彩を添くやう、十三年の軟弱の史劇は、此の扱お
のふふ女とせんも深まる事、侍賢の門前
親の墓の六七十の甲冑を着け、武人の歌
ふさまを演じ、いん丈もも外資の目を悦し
めたるやうんとおん人笑、軟弱が亂甲の陰
最味方と笑して、学海を中、と親の所、雪路
こゆ味方の色、色を産、と、親の所、雪路
進退谷す、森司、扱、の道、典、守、
も物語も、雪路のさまをよ、現、い、こ、ん、
外資の息、い、入、り、や、ん、あ、を、い、え、き、う、
回り、光、景、を、わ、く、変、じ、観、衆、を、こ、も、た、
： 是、を、こ、も、た、扱、巧、も、日、本、劇、の、特、徴、也、

扱、巧、一、比、を、云、へ、り、か、を、な、る、者、大、層、と、扱、
の、因、素、電、か、と、七、女、の、比、の、か、柏、子、木、を、打
つ、こ、と、を、演、じ、し、る、い、間、か、扱、け、比、感、か、あ、り、
也、也、あ、け、場、の、樂、物、を、扱、し、る、の、ん、外、資
兼、こ、我、も、か、甘、親、演、席、で、い、が、し、レ、ット、を、用
ひ、え、な、る、い、間、を、等、の、神、經、に、め、る、鼓、動、を、
へ、や、う、但、し、此、の、台、詞、の、劇、中、の、劇、も、こ、も、こ、へ、
を、社、の、扱、巧、に、意、心、の、光、輝、を、添、く、て、本、資
を、大、い、日、喜、ハ、セ、な、る、い、事、な、り、但、れ、る、是、常、閉
場、の、時、間、も、一、め、ち、も、後、の、と、閉、場、し、貴、大、層、の
退、出、の、時、の、観、衆、の、退、去、を、制、し、る、か、あ、る、不
便、を、與、く、な、る、こ、と、の、あ、ら、ま、り、木、挽、何、も、こ、も、扱、

口説二一説をねんじせり又圖書協会の同人と書大
の圖書館：判りの説まゝこのの観説記ハ前頁
：あんが并記をあをを喰は二三種多をねする
のみ

一カード室にる四十萬のカードを替り置いた
る大なるカード画七七八あり、こんハ未開の
キングレス、ライブラリーの古圖書、日本の
あるよゝ、京都書画のありのよ、こんとあり
年々四萬を替りすとも、カードの紙は
か故に一々裏打ちをきつてあり

一軍機真室の信問を古庫へ送り
返信を得る社長の書をみる、同人多く家に

群かりあ時之んを弄す、大規模の圖書
館にハ便利なる校に、圖書の出納に此
の校にも圖書室と書庫と連絡室
あり

一 日録室ハ書おし、一冊のカードを
置りくことと得、大抵書庫と換張する
設計、あんがも、日録室へからせんハ他
日録室もことあり、一千冊のカードを
置き得んが、元合と謂ふを得べし
一 説話室ハ未開の蔵あり、何れも毒を
を用ひつゝかを閉め、彼よりあるものあり、
あそびの笑つて思へ、此の扉を閉くこと

か故にその生に毒化するものと、彼が家と新
彼の小模倣をも油物と見做す、反血あり、彼
去余に一個を贈る、彼が何とこれを火器
る用かといふ不詳、どうして大なるか
評判、判らざる、かゝるとやへて一矣

一 彼が家と我が寶永年号に下る外四版
の口は甘大、ド、シヤホ子、とといふ書あり
日本の殉友夫人の事歴を叙する詳
か也、此頃の版式、紙質、七葉、外粗、
日本の本形、と、比すん、か、切、
受の、各葉を、紙、し、え、
いへ、し、の、終、尾、に、次、頁、の、首、語、を、

刊するを考とす、市時十冊又八頁毎、
頁尾に文字の符號あり、市時の一形
式、を、
式、を、

一言考、その他、
う、目、次、と、素、引、ハ、
れ、
と、
又、
大、
し、

一 陣列、
せ、
日、
関、
者、

○本日、入る小品架と置くと、きこいづる千と入る
こいのたのめ

一 新名西谷土佛 一 白磁の器用、花の根との

一 櫻毛和名陶器土瓶

一 口上陶器土瓶

一 猫毛を砂寫の河原

一 うじ大枝型銀茶掛けつり

一 センロイド細工象 一 埃及寶珠形二輪生

一 琉球産土瓶茶瓶子 一 堀田瑞柄心朱檀雲芝

一 釣具がき谷種

一 男の女ダンヌ小呂 一 猫毛を飾付

一 有田産白磁猫の茶架

一 太刀と冠

此外内子の七宝半平の物も、若くは別荘の
 石形油壺、旧式遠目鏡、伏見社守
 (交橋の犬) 象牙陰陽豆人形、土物
 猿(下谷屋、上品)二個、曉海心夕顔香合
 等、皆移して架中に見置く
 尚又、京都家傳の印の内、雁漢鈕の
 印塔形陶印を拾出し、架中の
 小の物も
 竹内久心若公傳も別荘に属して
 を架中に見置く



集古

昭和四年己巳五月發行

かつほうり

山中共古遺稿

かつほうり

本てうし

目に青葉山時鳥てつべんかけて鯉々とうりごへもいさみはだなるちうつばら五十五貫もなんのそのかしの相場はきなかで
 もまけぬ江戸子すいどうの水に洗ひ上たるいけたこの生いでもの店さきのそろばんづくならよしなんしぶりばんとさん
 そんなその八まきさせるじやごんせんないしゝの氣おいの兄様を見そこなつたかやみくもに高くとまつたお御堂のからす
 見へもかざりもひやうたんもねぎつちやいけねへさげ錢でこれでもばんにやおきやくさんひやかしかづの子の聲がすりや
 長屋の姉がとんで出るコレよつていきなにツイだまされてさげが云するいたこぶし南無妙法蓮花經高祖日連大ぼさつとお
 がみなさいめうでござへすどんなひねつた戀路でもすつかりちよんときまりやすなんの男は百貫だせいだせそこだぞ商ひ
 大事とくゐ旦那の御ひいきを八せん八こへほとゝぎすはつといふ字をいさみにてかつほくとはしりゆく。
 右は文久二年上方出板の吾妻のしらべ所載、江戸長唄より寫す。

同 常盤津 いさみ商人

俗曲大全所載

眼に青葉山時鳥てツへんかけて松魚と賣聲もいさみ肌なる中ツ腹五十五貫もなんのその河岸の相場は半分でもまけぬ江戸兒水道の水に洗ひあけたるいけたこの生ていでもの店先の算盤づくならよしなんしぶりばんとうさんそんなその鉢巻させしやごんしないしらのきをひの兄さんを見損なつたかやみ雲に高くとまつた御堂のからす見へもかざりもひやうたんもねぎつちやいけねいさげ錢でこれでもばんにやおきやくさんひやかしかづの子の聲がすりや長屋の姉がとんで出るとふ／＼のかんざし三ツ大に打替させたくいきまり好たきおひじやないかいなんの男は百貫だせいだせそこだあきなひ大事得意旦那の八百八町八千八聲ほとぎす初といふ字をいさみにでかつほ／＼とはしりゆく。

初鯉を賞味し價を惜まず拾を質に入れても、これを買ふと云ふ江戸人の意を、今人の想像するは難きことなるが、宵越の錢を使はぬと云ふ江戸人は、世間の見榮を第一とせしゆえ、他家では末だ買はぬ高價の松魚賣りを呼び留め、差身を作らせ食するを以て慢りとせしなり、此如ることを得意とせる者は、町の仕事師職工の親方藝人等に多かりし。

初松魚の價高きことも、今人の想像し能はぬことなるが驚くべき高價なりし也、春町作黄表紙『楠無益委記』に、『人王三萬三千三百三十三代に當つて初鯉極月廿日ごろより出て價尊き事八百八十兩ぐらゐ五百兩に付ては返事もせず而して後天びん棒上へ反る、かつを／＼とよぶ所ばかりも百兩のものは有るのさ』初松魚の高價なることを證す、また京山の『蜘蛛の糸巻追加』に天野三郎兵衛殿の初鯉のことを記されしに、『天明の頃我家の長臣渡邊松右衛門石町の豪富林治左衛門が許に至り初鯉の振舞に逢ひし時林が手代に價を尋ねければ今日は安し壹本貳兩貳分なりと云ひしとて立歸りて我が父へ語りたるを我等傍にありて聞し事ありき私父鯉を好まれしゆゑ出入の魚屋常に持ち参りしが初鯉は高價なりしが秋の古脊に至りては肥大なるも價貳百孔に過ぎず今は初鯉も貳兩參兩をなさず古脊も貳百孔の物なしいかなる故やらん』とあり。

川柳に鯉の高きことをい／＼に云へるあり一二をあぐ、

女房にいふなと下女に鯉の値

十兩はしまひ見せやれ初かつほ

初の字が五百鯉が五百なり

藍縞の魚裕より値が高し

蜀山人の狂歌に、

鎌倉の海より出し初鯉皆武藏野のはらに入れり

山の手は耳に鐵砲時鳥松魚は未だ口にはいらす

山の手へ魚屋鯉を賣り來りてて價高きゆゑうれず、山の手に住ふ人は、値の高き魚を食せぬゆゑ、口にはいらすといへるなり一體鯉は下魚にて貴人の膳には上らざりしは、兼好法師の「徒然草」百十九段に「鎌倉の海にかつをといふ魚は彼の境にはさうなきものにて此のころもてなすものなりそれもかまぐらゐの年寄の申し侍りしは此魚おのれらわかゝりし世までははか／＼しき人の前へいづること侍らざりき頭は下部もくはず切りてすて侍りしものなりと申しきかやうのものも世の末になれば上さま迄入りたつわざにこそ侍れ」とあり。

元は下魚と云はれしものが貴人の口にも入り、時代降りて江戸市民の何物をも置て、これを賞味する様になりしは、名稱のカツオ即ち勝男に通れば、武士の勝敗にかつ、江戸の勇が勝負事に勝つとの縁起をよるこび鯉を求め食せしに因することなり『北條五代記』卷七に「鯉鮓は毎年夏に至つて西海より東海へ來る伊豆相模安房の浦につり上る初鯉しやうくわんなり天文六年の夏小田原浦近く釣船多くうかび鯉をつる此由北條氏綱聞こし召し小船にめされ海士のしわざを御見物珍事の御遊盃酒に興じ給ふ所に鯉一つ船へとび入りたり、氏綱喜悅におぼしめし勝負にかつをを御祝詞なめならず即時酒肴に用ひらる。然るにおなじき七月上旬上杉五郎朝定武州へ發向のよし告げ來る氏綱出陣同十五日の夜いくさに氏綱討ち勝ちて武州を治め給ひぬ其の頃は四方に敵有りて毎日戦やん事なし氏綱賞賚し給ふ件は鯉は勝負にかつををともてはやし常に支度し諸侍戰場門出の酒肴には鯉をもつばら用ひ給ひぬ」と、以上によりて、大略本文の意は解することなるが、文句中には符帳文句あり、これらは知ることを得ざるが、魚問屋の符帳に、

イ 口
一 二 三 四 五 六 七 八 九

御藏前符帳に、

ソク プリ キリ ダリ ガレン ロンジ サイナン バンドウ キハ
一 二 三 四 五 六 七 八 九

本文に「河岸の相場はキナカでも」といふあり、キハ三、ナカは五にてはあらぬか、もし左ならば、三十五貫か、又プリバ
ンは二貫八百匁か、何れも不明のまゝ記し置くのみ。

の風の変わりなり割直まを此次口より三よ二三を
左に掲ぐ

日本橋渡所の花長といふを敷テンプラといふ人
の知る事なきが部を行使せる一應情状
入んも、えい待合を先客の喫し畢るも
とこに待合也、やむと順着とまん、天鼓

河

酒をあける高く道守か、一室の中央に寺のゴ
マを焚く壇も形をすまきよあつて、その
室の中央に衝立の如きしのも仕切るまこ
アフロンをあけたる大男望し、其前に油の如き
リ等細鉛あり、その錫を圍む台のへりし
する銅板のこがうあり、客人は約四人位先
で錫に對して坐す、男は歸るもき若を以
つてアかりたる魚を其の前より置きしある小
皿に投するを待つる客は之れを喰ふ也酒
も飲める仕法とさうなるも未だ出来ぬ
ころ、定々所定の分量を配り畢
ると、回りまの如く、錫に坐する人もグル

淀屋辰五郎といへば徳川時代を通じての大富豪で、大阪に米穀取引所を起して巨大の利益を占め、其の生活、勢力は百萬石の大名をも凌ぐ程であつた爲め、遂に幕府の忌諱に觸れ、寛永年中、身分不相應の奢をなしたとの理由により、關所を命ぜらるゝに至つたことは、何人も知る有名的事實であるが、全體此の當時の大富豪なるものはどれ程の富力を擁して居たものであるか、それを今日の三井、三菱など、比較すればどんなものであつたかといふに、此の淀屋の財産目録として傳へらるゝものは幾通りもあつて、一定して居らぬが、比較的正確と認めらるゝものに就て見るに、其の額は想像以上に巨大なるものであつたらしい。茲にその一部分を擧げて見れば、先づ土藏が七百三十ヶ所（内六百四十ヶ所は米藏）、此代七十三萬兩、船二百五十艘、此代二十五萬兩、女房の船二十七艘、此代一萬三千五百兩、金屏風五十枚、此代一萬五千兩、千二百兩より千五百兩迄の茶碗三十七個、其他五十兩、七十兩のもの無數にて、茶碗合計代十一萬八千兩、徽宗皇帝の

淀屋の富

淀屋の富

繪十枚、此代二萬兩、唐宋元並本朝畫人掛物七百三十三幅、此代三十五萬兩、刀劔二千七百口、此代三十五萬兩、朝鮮人參七十七斤、此代六萬千六百兩、當時朝鮮人參の非常に高價であつたことに就ては別に延べる折があらう、辰砂七萬斤、此代五萬八千兩、現金三百五十萬兩、銀十五萬貫目、此代千四百十六萬六千兩、錢五貫からげ五十五萬把、此代五十五萬兩、諸大名への貸金一千萬兩、公卿へ貸金十三萬三千兩、諸士衆へ貸金二十萬兩、此外金銀にて作れる鳩、鷹、雀等の置物、珊瑚其他の玉類、蜀江の錦、水晶の障子、金製の碁盤、磨れば水の湧き出る硯、金銀彫りの手洗鉢等の珍寶一々擧げて數ふべからず、家屋は大阪に一町四方の家十二ヶ所、十町に五町の家三十ヶ所、十八間より三十間の家二十ヶ所、二十間四方の家三百五十ヶ所、伏見にも家屋百三十ヶ所あり、其他山城、攝津、大和、河内、和泉、近江等に山林、田地等多く、以上の財産を合計して金一億二千八百八十六萬餘兩に上るとある。此數字には十分の信を措き難きこといふ迄も無いが、兎に角、淀屋の富力の如何に大なるものであつたか、其の大體は之れに依つて推知することが出來やう。當時の日本に於て、此の莫大なる富を以て天下に號令すれば、何事でも出來ない事は無かつたに相違ない。幕府が之れを一大敵國として、遂に其の全財産を沒收したるも、止むを得ざる措置であつたかも知れぬ。

一四に二五の、盛るる、多く各地の名物を
依賀のガニウケ、徳大寺納豆、加賀のく
ち山のせきこよも出す、他、早稲、名茶、桑
といゆるも各地の名産を調理し公
平なる材料の出所を注せり、
此外形式の珍高の、まゝの料理や、象
つて傷ももつる、其の所司合の料理や、象
刺家楠瀬日年が自定、象の料理や、
つておふ、蓋し物が得意とつておふ、
のる難、小やつておふ、今、昔しから名高、
も、店が、おふ、おふ、おふ、おふ、
とあるやうに

○京都の古碑便利堂田中倚之が在任の時
書を刊行して各圖書館の有無を遍し六ぬ書家
の需用を慮ると念じて新村出博士を担任し
其等の材料を求め、此處に其の取扱の爲め
今迄の材料を扱へん。便利堂の如きは、
名義を出してある人々の新村の外内、
星板佐美高木利太の四人が、
此の星板新村の外、今書家、
吉一松井清平、と余とを、
せりしが、圖書館に、
推せん。圖書館に、
が中、

新刊

とあるのは、
復物も人々とあるのが、
これ所以である。自分、
係もしてある。圖書館、
事業もする。誤解、
此、図書館、
るい、
の有無、
支、
てやつ、
リ骨、
し、

視

にない。實は官吏侮辱といふても高田事件に關し、警察署長を誹弄した位な事である。豫審の下調べに關する記事を掲げたといふても高田事件に關して入獄した人々の談話中滑稽味のある挿話を掲げたに過ぎぬ。判決書にある出獄土産が、即ちそれで、被告人が釋放の後書いたのだから、無罪の判決を與へた通豫審の進行を妨ぐることに記事でない。

今、内閣の大臣を倒したり、公然倒閣を叫んだ中のある程度までは書く事があるのに、當時の事は如何にも苛酷で裁判所の態度も兇惡に類するものがあつた。今日振りかへつて當時を追憶すると眞に夢の如く隔世の感がある。私としては當時の判決書を明かみへ出すのは、材料として追憶の代りに爰に提供



に入つて行つた。源之丞は絶え入るばかりになつて、打ち伏してゐた。

ニマシ油

万支

と思ふワヨ……あたし……らないワ……なんて云ひ出されさんスツカリ閉口してしまひ

③ 其後叔母様とこの太助さんに又呼ばれました叔母様は茶室に「此前の時はスツカリ降参したワネ 今日はお加減いかい

の左：ぬめり切り抜、判決書の前の記さる余の筆に傍り、面影の文の辛由と語りたるを記あるが草紙しるものも、余の「招致の志」ともあれ、筆は粗漫毎り地方記者と困らせり、

更くもと知らるるおの言とを、殊と面白し、
 仿忘と書るべきと候、神、八月九日

裁判の1500

一萬五千號を迎へて 創刊當時を偲ぶ判決書 笑ひ話の様な裁判所の態度

市島謙吉

裁判官言渡

高田新聞が創刊して一萬五千號を迎へた。その記念として、創刊當時の判決書を振り返る。その時、裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。



市島謙吉氏

裁判官言渡

裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。

裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。

始めて世に出た時の本紙
新編前金御旗被下度候
日曆二月二十四日○さのとい
日風雪 寒暖計正午四十五度

市島謙吉
設楽正吉
竹村良貞
印刷長
假編長
社長

その時、裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。

裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。裁判官の態度は、笑ひ話の様なものであった。

○左にぬめり切り紙、判決書の前の記号に余の筆
に傍、西館の文の辛酉に傍り、記号が草紙
し、傍り、余の傍り、記号の末に、草紙
粗漫な地方記号を、用ひせり。

茅魁飯豆平生
閑草岩友若身
筆の裁總口演



6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2

此種は清くある主結ひ、在るに限らず、漢
書に書きたるを以て考ふるに日本本土の故を
却て在るに少くも有る。邦語と其のまじり
つらひ、まじりつらふ邦語に振らんと言ふ、
羅馬字に在るが、一あるある、

五月十七日記

○未だ実物に振せざると、米田の一種の草が
あつて其の根が化音作用の混濁を吸
収し七音のみの清濁を保ちしあると云ふ
無論の草心、厚皮の根といふか、ぬか
日本は澄水草といふてみる。外國は、
湿り地、マラリヤの病キンがある所から
此草を植えて浄化作用の之を思は

漢書

まるとすべし。五十音力の考の詞彙の内
此草に就ての文讀が考あるとある。まじり
振るとある人から振るとは睡蓮を平鉢
に入ると言ふと、何れを何れか清濁の
他のを多量に入るとは鉢に二の七
と又、濁りの不審、何れを睡蓮の根
を換へると言ふ、他の根が附着してか
た、根こそ清くあるの根であつたと
記す。入んおくと、何れを清く
一衛生の考のまじりからう。何れは
以来あるといふがある。

○近來、下手物を「後美する柳宗悦」一派の人が
ある。這々「手工が機械工藝」と「換り、手工が亡
いから今日の下手物」の美を説くものも偶れひある。
本来手工とことを創造力がある、天然自由の所がある、
天然の美がある。殊に「衝いさる、若さを求めたる、獨
自の技を頼り、其も他を模倣せざる」とある。自記の
美がある。言ふ所の「ある」若さるるを「職人」も他々
に比しよると。然るに「範圍」に於てこそ却つて「純真
の」よがある。人間は何故か他家の益を執着す
る。人間は何故か偽美を美とし、之れを崇拜する。
溜々たる工藝が「界」がいや上と七技巧を激しくし
自記の「表」かり「純真」を乞ふことを知らざるハ
三二二

運はんにあ、當時の民衆の誰も用みず、よ、
下平」と呼んで日々の道具に用みられ
よ、裏年の晴きと重く使はんによ、彩りも
ろく分りもまお朴なるよ、終も多く儂も廉
そこの、此低い美の中、さうい美があるとい何
の攝理もあらうか。あ、無心も思ひの心、一
物をも看れさる心し、知を誇らさる者、言ふを
慎みあは、清貧も悦ぶ者、遠目の中に、神が在
るとい如ゆる不可思議なる古、恥があらう。同じ
よの教へか、また等の、其よ流ると後、さる
いさか。

而も奉仕に一生を委ねるよ、自らを捧げても日

日の用を教へるよ、港あらうも、現実の世の働
くよの、徳を満足というち、老のをもさす、し
誰七かの生活に幸福を誇らうと志すよ、そ
人等の懐き、い黒の一生、美が包さるよ、そ
あらくさき、事柄むいさるか。而も用みらん手
づらる時に、さ美がのや誇るとい何の天を
むあらうか。信仰の生活も犠牲の生活
ごあう、奉仕の一生むいさるか。神に仕
へ、仕く、自らをさる敬虔なる者、その
姿が主に仕へる美もえらぬむいさるか
か、現実の即さるよ、現実を、賦え比美
か、最も鮮かに示く入るとい、如何に微める偽

何れもその家の所領から人の持ち来つて居る
 此のものがあつた。有徳の獲えたるものを其の
 思つておそれ、所存もつたの、其の高名に教其の
 外國のその文意家の所領のあるを認め、その
 中を過つて遊、獲れ作、獨逸でプロング
 堂ひある。左右にコワラージを配して陳列し
 て見ると、ぬめと點、所を得る心地が、しつて悦
 入つた。

○楠瀬日年の山心左、叔、安江、一、流也

之云 珠林 星雲 閑人



○今次出版せんと異、四書、著者、村上直次、
 博士所得のビスカイノ、今、此、探検、報告、し、ド
 ニ、ロドリゴ、日本、見、す、其、二、三、篇、を、収、め、共、に、著、者、
 十、三、四、年、一、西、班、牙、人、日、本、親、交、記、也
 ビスカイノは千七百十年、ドニ、ロドリゴ、著、者、
 西班牙人、メキシコに、遊、び、及、び、其、禮、大、使、と、も

一六二二年六月日比谷に來り、沿岸の測量を遂
け三二二年九月金銀島の探検に向ひ同年十一
月舟八日を來り、一六二三年十月伊達政宗の
使船に便乗してソキレコに帰還せり。
ビスカイノ再度日比谷に來り、難風に遭ひて
破船の跡が考められた。船状を羨するは、新船
を造らざるを得んとし、終に支倉と左
衛門と伊達政宗の知事となり、終に支倉と左
衛門と流すの船に日乗し、悔死すること
ころりたる也
日比谷に金銀島ありと云ふ時、西班牙は
此行を夢の如きこととせ、迷ふにビスカイノ

ハ西方披きし、日比谷も其目的を達せし
といふも無理なり。
ビスカイノの國王、客を以て報告中、日本
ハ武を以て征服すること難し、宗叔を以
て征するにもし、日本人の多敷キリスナン宗と
るに、其結果西班牙ハ自死無いて日本國
王を以てし、ある、謝禮便といふに、托
し、其の異志を抱き、おぼし、よるし
政宗ハ之を疑持し、其の信をぬの誠意を以て
或は海防の大志あり、其の事ハ終つて、
左の記より、如きハ死者に信して、如きこと
なり。

一六二二年一月二日即ち支那十七年十一月三十日
の條凡左の記多あり

慶長十一年十月廿八日陸奥、大地害あり、海嘯

陸奥

之、はひここと大日本史料あり、此日の記るに云く

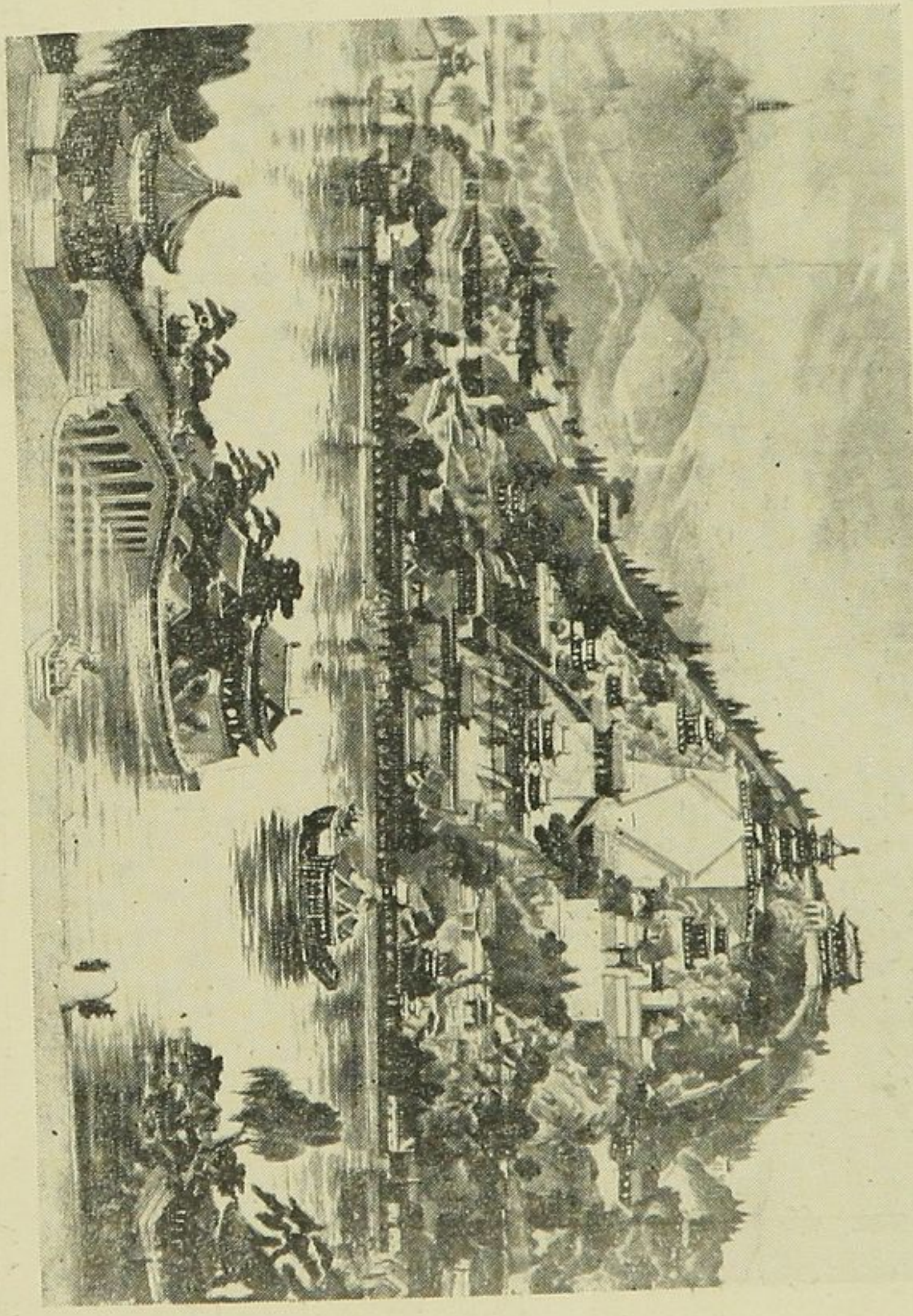
金曜の十二月二日我我寺に越去末の村に
着きしを又一の入江をみするも月をるさ
ず、此處に着く前住民の男も又此村を捨
て山に逃げ行くをえり。是れ他村の村々
に於ては住民我寺を見人為の海岸に生し
かた、我寺に之を異とし、我寺より道人
とす。このをるく、待つべしと呼びか忍び
其原因は此地に於て一時官造後、セー大地
害の爲め海あり一にカに十九廿九日の
さをもりし其隙を起え、異事する力を以

て流出し、村を浸し、家及び菅束の山の丘上を海
に吞み、混乱を生じたり。海あり、地あり、三面
進退し、土人の其財産を救ふ能はず、又あ
教の人命をとりひたり。之に由り、午後五時
に起りしが、我等の其時海上に在りて浪
動を感じ、又波濤令多し、我々の海中
を吞べしと考へたり。我等は進路せし
舟二艘の沖を、海波に沈むるに沈没せり。
神聖なる我等を、此難より救ひ給ひ
しが、了らざるに我等の村に、善相なき鬼が
丸なる家、杉を厚敷きを多しけり。

ろい為さるゝの思ひにうらた。蒙を
吹く風より多量の粉油と支那内地へ
輸すそのにあらが、こゝには田舎の地味
るるゝ要事があること、此の事

江戸時代の流が出れ中、昔一雪駄が流の
しとたえ、不時雨と遇つた、左きくも泥
路を履ちよきの用意なる商人の葉の
折畳の出来、不駄を懐中し、こゝ
か、とす、折畳の方法、今日の千ヤ
ブ、足の脚を、器を、のを見、と凡そ
袋か、の、こと、ある、から、松の木の葉

いよを、にし、と、あ、さ、え、入、り、境、中
す、代、を、わ、古、流、り、更、ゆ、を、用、へ、た、
あ、う、ら、と、不、安、の、想、像、を、也、せ、た、
この、流、り、の、数、し、者、し、ま、原、の、奉、書、に、作
つ、た、足、代、を、考、へ、た、と、お、る、者、の、こゝ、ま、
物、を、法、に、知、ん、だ、か、掛、け、流、し、て、棄、て、た、よ、か
ある、通、客、の、物、を、作、つ、て、懐、中、に、さ、し、て、お、く、
と、折、畳、の、不、駄、の、考、と、し、た、



山 壽 萬 京 北

○赤糸名に就て母一二をあるも、其糸名を
社に此次り多くの容無を必す中、玩具と樂
いよかともなくある、坊河教業中、獲比
よの物糸名の産む口を開いてみる、其口が身
体よりも大きい所、滑然香味がある、恐らく外
國産直を産用し此の糸名も、茶巾より大
良物糸の極も母少のさい橋が二三十あると容
器を得るより此の糸名を口一杯日入九七一
九。亦此次人から此の糸名にハガキ笛が甘おかし
い味がある。是の糸名を洗滌して乾
かす時は、風を起しぬ、為る、列を物めりよ
かある。小さな板を二枚合はせ、其の中

の書幅を焼く。病後を免る。余の家の家能
 下関守の在るにありし時、其江か考いて
 一より三種の野菜を畫す。家能一二
 其江の物あるも、余の家のため書し
 ころも也。先年前原一誠が余の爲め書し
 たる忠存節義の幅も、余の幼名稱しあ
 たる家の名を家と有りたるが千々入りたること
 あり。あか氏の其江の幅も前考と因し
 一旦長主より出りたるもの、轉輾して四主に復
 して也。其後とまある可也。此の幅日の干
 支をあるも、丙子の丙辰九年、余東
 条に遊する中、此幅初めに見る所也。其江

紙後：折ける、お坂の筆也

市吟雅之、下関之田園新築一十餘畝、
 舟島境、中山、山、散野、菰、晨夕、手、橋、以、代
 飲、徳、暇、別、貯、雲、物、各、名、之、詩、以、美、之、性、空
 人間、清、福、孰、如、之、頃、名、遠、使、素、書、乃、為
 此之併、林、表、答、云、云

丙子三月、余將、遊、在、東、条、殊、由、也
 其江、定

高、又、一、冊、の、高、を、稿、を、給、る、友、非、者
 高、和、と、署、す、三、浦、瑞、伯、厚、の、詩、又、を、自、ら

鞆のなるいふ也。此人余が郷里の医家にて此
 人の子、三浦宗春といふ余と交りあり。郷里に先
 輩の記念として此物をも珍玩せんとす。
 〇雖を此の百端の言を近きう、往々思ひひつた
 の何うもいふ事あり、梅嶺の年が
 前りて之れを懐く入るる台所雜とよふと
 見らば、鏡を成るるしやえしと貝杵子の田形
 つまよふお内祝物とぬの顔と書しきとえん、彩
 色を施して、美を錫蓋の平面に装し
 たる工風を海老のぬくもさう、此の錫蓋も
 梅嶺といへりてありてあり。 九月廿九日記

何處へいつてもその土地土地に、昔ながらの郷土を語る、懐しい玩具、珍らしい人形、傳説を物語る縁起もの、一二つは残つてゐる。伏見人形のお角力さん、堤人形の天神様など。

その、名物玩具を、久保佐四郎氏によつて、さらに美しく創作して、同じ趣味の人々にわかつて楽しむ會を起すことにした、恐らく大俵の玩具黨はさんなにか期待して欣ぶことであらう。

この催しは、第一回をさきに計畫して、非常な好評を得たものであつたが、幹旋者の都合で中絶せられてゐた、それがいかに残念なので、ここに五月舎が再び發起することにした。

御存じのことと思ふが佐四郎さんは胡粉もの、練りもの、張ぬきもの、木彫りの人形作者としては、東京隨一の名人、明治の生んだ最後の江ッ子といつてよいのである。

胡粉の艶、燕脂のさえ、毛拂きのあざやかさは、及ばない美しいものである。佐四郎さんは諸國の名物玩具を、せいぜい一寸三四分ぐらひの大きさに揃へていろいろに作つてみたいと言つておられる、それがこの催しなつたのである。

佐四郎氏のこの作品は或る意味に於て畫家のスケッチのやうな小品であるが、それだけに佐四郎氏の面目が、充分發揮せられてゐるのみならず、佐四郎さんが、賣出しの出世作もこの名物玩具の製作であつた。

一 佐四郎さんの諸名物玩具の會は一回に五個づつ配達して、六回卅個をもつて一期ずつある。
 一 六回には全部を入れる柳箱を附し佐四郎さんに箱書を書きつけてもらふことになつてゐる。

一 個数は八十組を以て限りとする。
 一 申込みは東京四谷右京町十三 五月舎宛のこと。
 一 第一回目の配達は、奥州堤の花傘人形。武州熊谷の天神。京都のおれさま。同ふくら在。琉球の張子人形。の五點

一 金具より 同金具四世

○高きくも好まざる三浦友木高の遺物を後
中二抄は母抄十四首あり、輕文降と云ふ所の
詩あり、五卷の北城の語と若く時早ありて北
の遺物を関説し、今や否や、数枚を親後
の二噴飯口を禁し得ざる文あり、若原某稿
の二枚の子を叙す、此稿亦もあんとも遺尿
の癖あり、一巻の北城を志せんが大坪の後世に
眠る、望朝眠覺めて寝具の遺あり、氣
つき自から考ふる事と速断し、其を籠かす為
め、中の起きを漸やく乾くと待つて、稿を
一巻の友人柳柳掄と遺尿を云ふ事あり、
秘蔵の現いん等を怪み且つ惚ら且つ好

三浦

る、友人云く君何人も怒る、彼彼遺尿の癖
あり故に云ふの事と、其初めを覚り且つ恥
す、北文を属し、三浦の東都に在るの日
此をゆめき、物に若原に此稿を求め、其
合するを得ざる事と云ふ、其処に、一七、其
也、三浦の通稱東果と云ひ、世々遺を云ふ、其
の先、伊藤仁高の子といふ、此人成底の
騎馬も考家、此の念中、其甲の考あり、
殺さる、其時余は亂今も此稿を記し、
才、蓋し騎馬の故に誤解を云ふ、
兼て此も、

北巻の中継り、能士正の巻を好する、このあり

○高橋流を身内の節落つべりの冊子を示して
余の感志を約白に宛てることもまたその間
へて見んハ美談紙十二行界紙三枚約余
日認めざる書簡ありし心友と好く交るよめ乃
ち遺書なきを報知紙の部中陳紙後版
に余の古き年時代の証歴を連載の折
此の書簡の或る部分も皆その現れし余
とて驚かぬものなり其の原書也余は後其に
陽世の感ある日附を見えたるの次十四年
九月廿二日夜於此片を友人に草下之とありし
答の主意政体の美談を説き表かすや此
の政体を見ることを欲し其の政体下政

堂の美談あることと況き、尙の自人が業
一と刊行し其の政堂論一冊を之を以て
交へて談論の概なきを遺書とす之の
に就て余の所論を録りしものと云ふが此の一
の節の大言なり十四年ハ大隈侯回台の論
議を建論して桂冠の時より、主意の政機
に動く、此時にあり政堂論の著者たる敢
て怪らざるを以て但し余の政堂論の既発
のよめと撰を果す、政堂の本質得んを
後見いして吾の詳外なり、此者の自由ある意味
の出版者並に流に及して出版せしめたる
しよめし附録の校板の自由流況を以て

揚げたる。余が南時ありて長にせりし家
とあるの首書ありて生したることありしと
懐に起す。此方前日の花死に原令生
守子子石たり。羽田文花星直武の四
名を星のふ所余が先輩也。而して原
のふ所自の重味の人なり。原は日郷
の遠のる余が印時家庭ありしと余
妻の後と致くす。安子羽田の婦人。古と
羽田山ちの塾にまゐりて星の先生
塾にまゐり余を日宗とて名を置りし。安子
子の居難。柏屋と云く。羽田の所也。古し
ことあり。羽田の遠の子。星直武の

日郷八幡春日の。子。余を日宗の好
あり。今に北山人。皆之。羽田の
た。羽田。感概久之。 五月廿五日記
○前頁は。余美雅の。を。端々
此人。初。思ひ出。事。 餘念。事。心。事。ふ
系の。奥。里。近。外。城。の。湖。邊。に。大。き。き。邸。宅。が。あ
つた。自。分。の。幼。少。の。頃。に。暮。ん。て。み。た。が。多。く。盛。時
と。思。ひ。あ。り。ま。あ。が。あ。つ。た。北。家。か。ら。自。分。の。家。の
祖。母。と。祖。母。と。未。だ。嫁。ま。ん。た。り。び。重。い。親。戚。が。あ。る。が
自。分。の。叔。父。に。當。り。人。が。多。く。出。て。甲。府。と。工。部。省
に。出。仕。し。て。職。名。の。書。に。記。官。心。も。あ。つ。た。比。か。ら。古。記
懐。し。ま。の。が。無。論。奉。任。官。が。あ。つ。た。 原。北。陸。の

倉の奥とすうと数冊と座敷の一隅に机を据えて
居れば、司法者たる出仕の志があるのか、日新
律儀欲と油を居れば、ことを思ひ起す、然るに
の二郎者奉仕、何年尚續いしか、純句の光ハるい
が友を罷のせから、いろくの日論見をせんか、あ
の人の事業家たる、何不能かあつた、志あり、遂
に成印しうらうら。今ふ、自らの家から、おまをを
出させし、何か事業を日論せんか、せんか、せんか、せんか
にゆい、自分の父や父の末弟(吾老)と成、こ、石油
事業を、紅蓮さん、せんか、せんか、せんか、せんか、せんか、
つに、志あり、何人の事業家たる、執心、計画書を
せんか、せんか、後念を、せんか、せんか、せんか、せんか、せんか、

此間、本邦考、勸業、真利、奨励、命を起えり
業し、やう。全四の紙あり、建勸書を送つて
何んか、おの、経、海、海、を、論、せんか、せんか、せんか、
あつた。その、頃、自、令、七、可、う、進、ん、お、せんか、せんか、
の、案、を、立、て、る、際、に、せんか、せんか、せんか、建、勸、案、を、福
し、せんか、せんか、あ、つ、た。官、を、罷、を、後、に、不、知、志、せんか、せんか、
の子供を教育する、困らん、せんか、せんか、せんか、志
かし、宗、欲、の、興、心、の、工、の、察、目、(後、の、二郎、大、考、)
を、卒、業、し、其、弟、の、茶、三、外、三、人、の、皆、大、考、を、出
た、から、教、育、の、進、業、に、無、つ、た。不、知、志、の、結果
者、介、の、宅、七、考、り、其、の、其、不、に、居、ん、せんか、せんか、
あり、日、比、谷、大、神、宮、附、の、借、家、に

早礼に巻の此時未之人に格と余を仰へて成
 の交際下手に出無性と云くして志きりな
 見ひ言とこふれ。余の殊毛ひるすてた間
 柄ていさひのふある。あふの先生の七十一の
 舞の時といふ今と出た未のむ甘海魚の
 の法と交へたかよふが家後ひあつた。張る
 後家計に困ることゝ未之人かある三が
 和の家と行なをむのむ廿法と頼まぬの
 と自分の金紙へ使用するこふと一れを
 の名に理へてあつた

印材品目△桶州以外ノ此ヲ示ス

田石	笑菴	雞血石	魚腦凍	艾綠	鴨雄綠石	梅花紅	水晶凍	廣陰石
第一等	封門青石	皇青環凍	紅榴紅	血紅	第二等	天藍凍	靑高山	靑田
第三等	牛角凍	高山美人紅	靑田	牛角凍	第四等	月尾石	廣東綠	連江黃
第五等	吊狀	其降石	萊州石	水黃	第七等	竹頭窩	大下黃	

自修古州印譜中の一冊楠瀬に貸つた残りあり
 を授けし一二三番に記すべきものありし氣を
 する。尾如徳川侯所花の紅印風の古州印
 二十三枚の書ある紅印といふ面あり故を異
 しく中二三顆二寸角一寸六七分四方の
 ありしり刻字七あり珠也。又八次後藤
 の印堂公珍花のよき家原尾如侯に
 傳つたりしと傳ふるものありし先年里川真
 道より其印影を示せん等を克田中
 氏よりし模考せしめたりし此印冊中
 あり。真道の法より先年真教尾如侯
 へ此印を授けしと傳ふるものありし里川真

尾如侯

の印類に尾如侯の原印。雪居丈と免か
 らしむるや否や其の消息を知らぬを
 疑し。焼火しつとすべし。此印影模考を
 する。天地乃に傳ふるありしと傳ふるを得べ
 し。此印冊の中より。安田美治りしを授けし
 雪火に焼けし。慧日寺中花の三顆の印
 ありし。収めありし。三顆の傳來。一平城寺所賜
 一。天長二年。淳和帝所賜。一。承保年間
 白河帝所賜といふ。此等印の集古中程に
 収めし所。其の雪火に焼けし。揚子江の地名を
 北外古印といふものありし。北海道の地名を
 刻し。官印四十八枚(皆木印也)を

迂とて換字せしめたるよあまう。いんり川と
 曰ふとんりうと見えぬ。あぬ三年丙辰初夏
 友家命春み鈴木勲の刻すも不也解
 世園印諸よりとやましくか未比其の印諸
 たるんす。此地名ハ何人か撰ひたりや洋外
 人多。今地名ハ漢字のハメ方異つて、印文
 の地名ハ云と雅也。然るもあまうの故之
 九に從ハてりしや。依吏ハ似し。漢字ハ
 本邦と雅別を結く字を南と見えし。
 今左に印面の地名を挙げ、撰ひ方の作
 るとあまうのす。いんり川武印のりるもの
 際、又あまうの撰、未比詳かゝるす。結りし



竹條崎三島

小竹文

竹條庭道印

無款

竹條一古子

主軒の主人

森隈私印



逸所刻

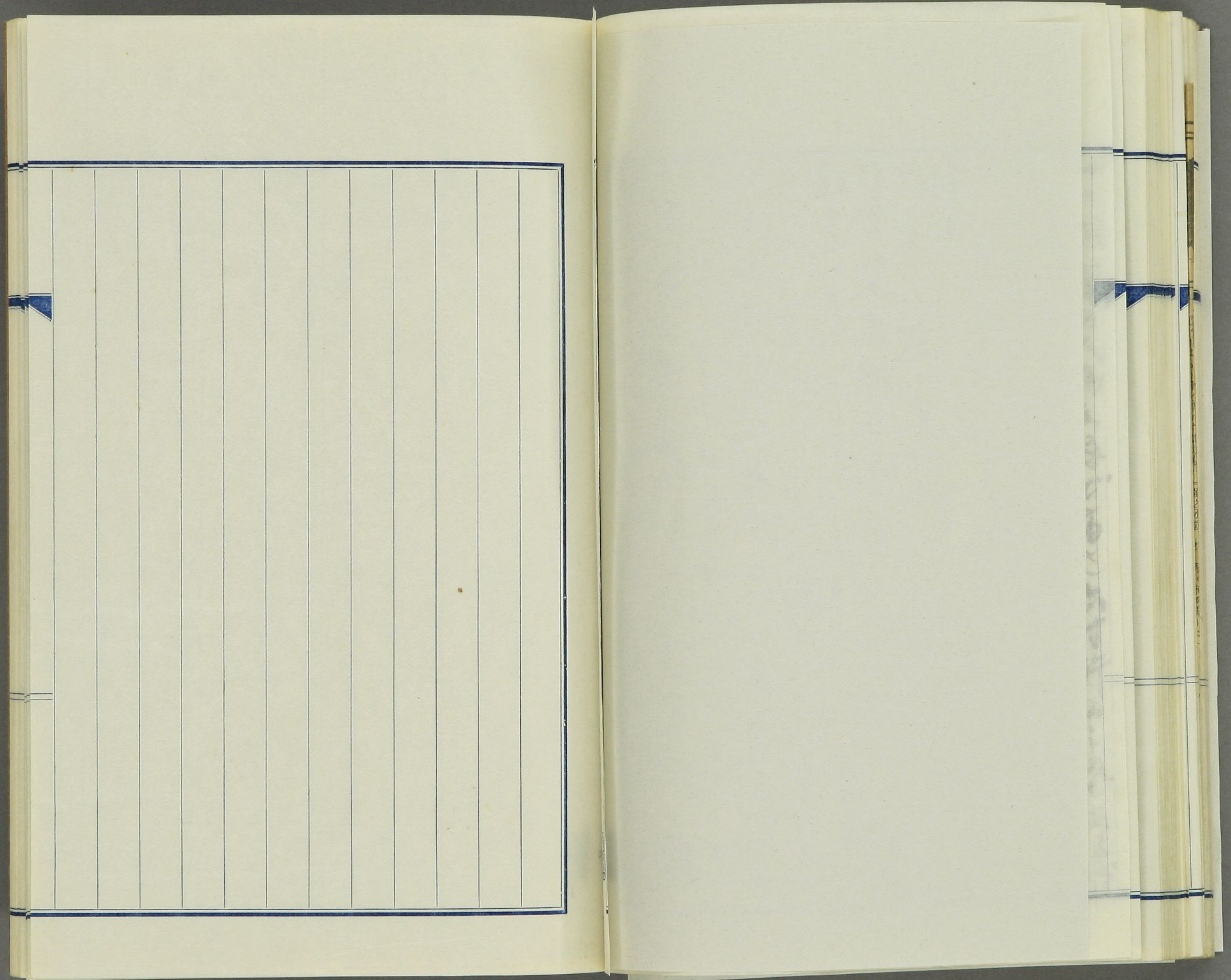


一、銅製の人物土像は高さ六寸許のものもあるが、
 る古物もあまり多く合換物ばかりである。今一つ
 ハ埃及の物に似つて北川編が土に出来たもので、
 だがおかしみのあるもの。此像を造るに序
 る自分の道徳を述べたといふ事がある。押入の中を
 捨つて四五のものを持して、中より菓子皿を
 瓶もあつたが、往年物故者の物つたものか二
 黒も、一つは鳳山の三軒茶屋中村屋の
 銀の朱漆のびもつたもの。天目世をひき、高さ
 ハ寸もある。住むに、今一つは木製の摺り鉢
 び野の時代の物。お栗の記に、物をもえ
 左河津の古物に、あつたものと、後の方へお

祇園茶屋

倚くとある。江戸の出来さうの頃、木製の北
 の鉢の中、木製の目を主として、いんが茶屋の地を摺つ
 たりよれとあるが、大葉菓子器に見え、白白
 の受取品である。故今迄の一年、見まの肉
 たり、白白、変化して、多くの家へ出来、高田の馬
 場も、白白見も、白白、立派なうら。五月十日
 の余が、小品棚の辺、洗左の字、其の如し、列る
 既に土方を起し、或人と買ひ、白白、地を存せしむ

五月三十日記



石歌

春城先生有市無龍文周家苦抄示法... 中時... 道... 文... 何益... 春城先生有市無龍文周家苦抄示法... 中時... 道... 文... 何益...

自題 小照 短冊

澗月朝風有露傷時... 雄世上人只人哭夢中... 仙翁弄耳

自題小照二首 五峯居士景初仲

新居有盜擊室... 昨夜先... 食到今朝...

越日偷兒就捕... 一事人間... 獨有青蚨...

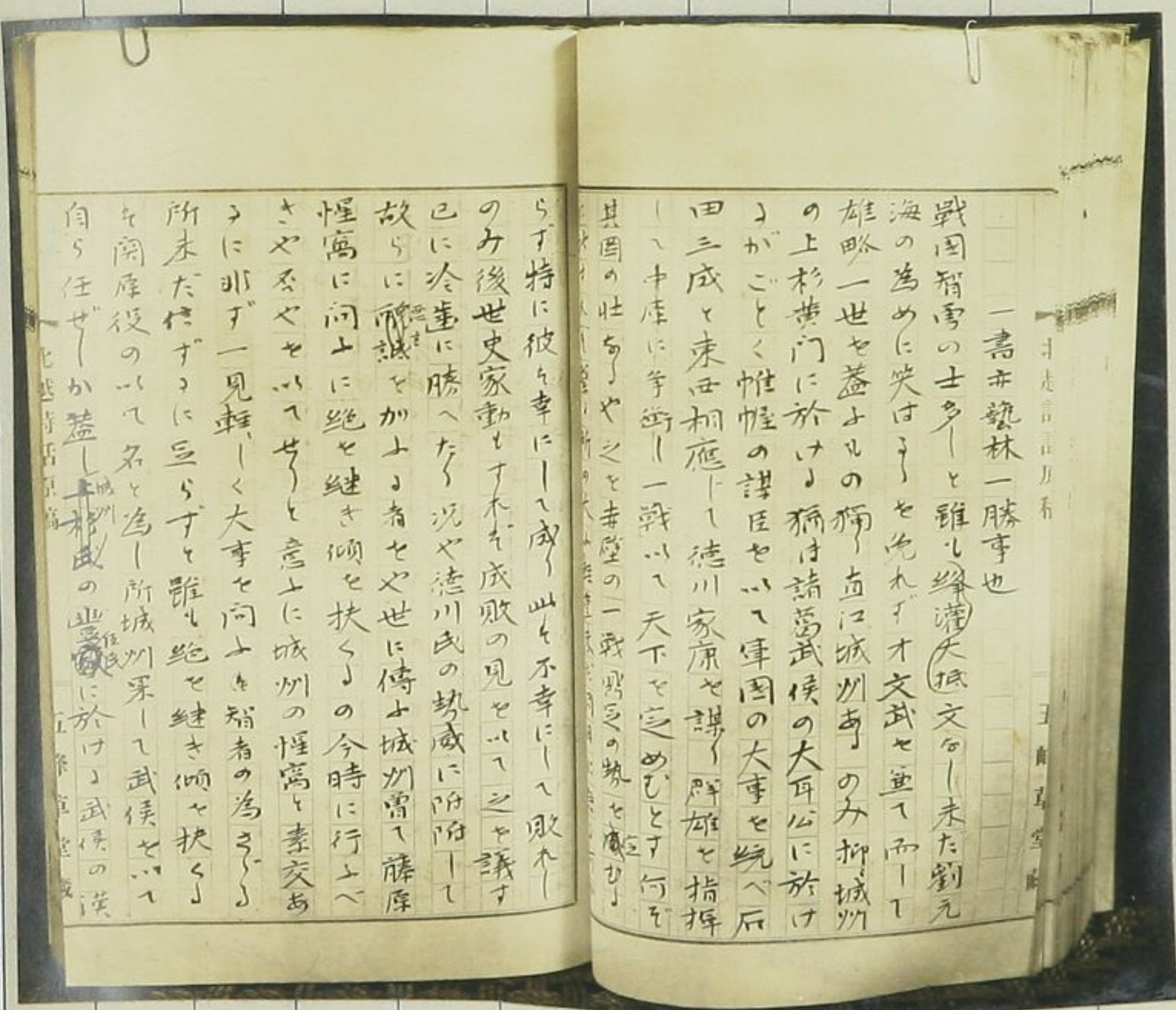
每首有新意... 第三詩尤...

東台三... 雲... 清... 是... 無...

苦寒十字精鍊... 如此...

五峯詩行 之一

森槐南 朱批



北成待祐

系村

上杉通信

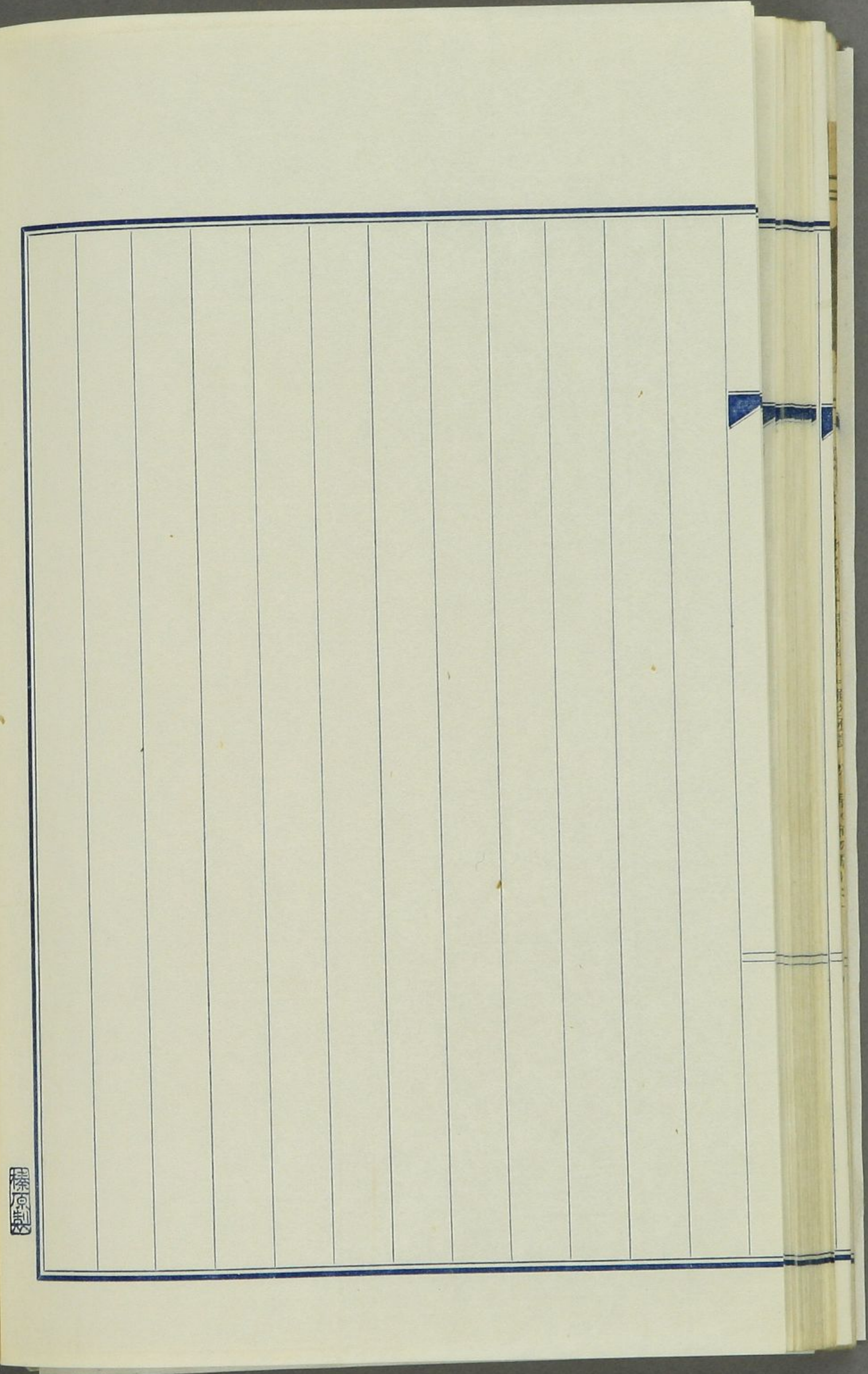
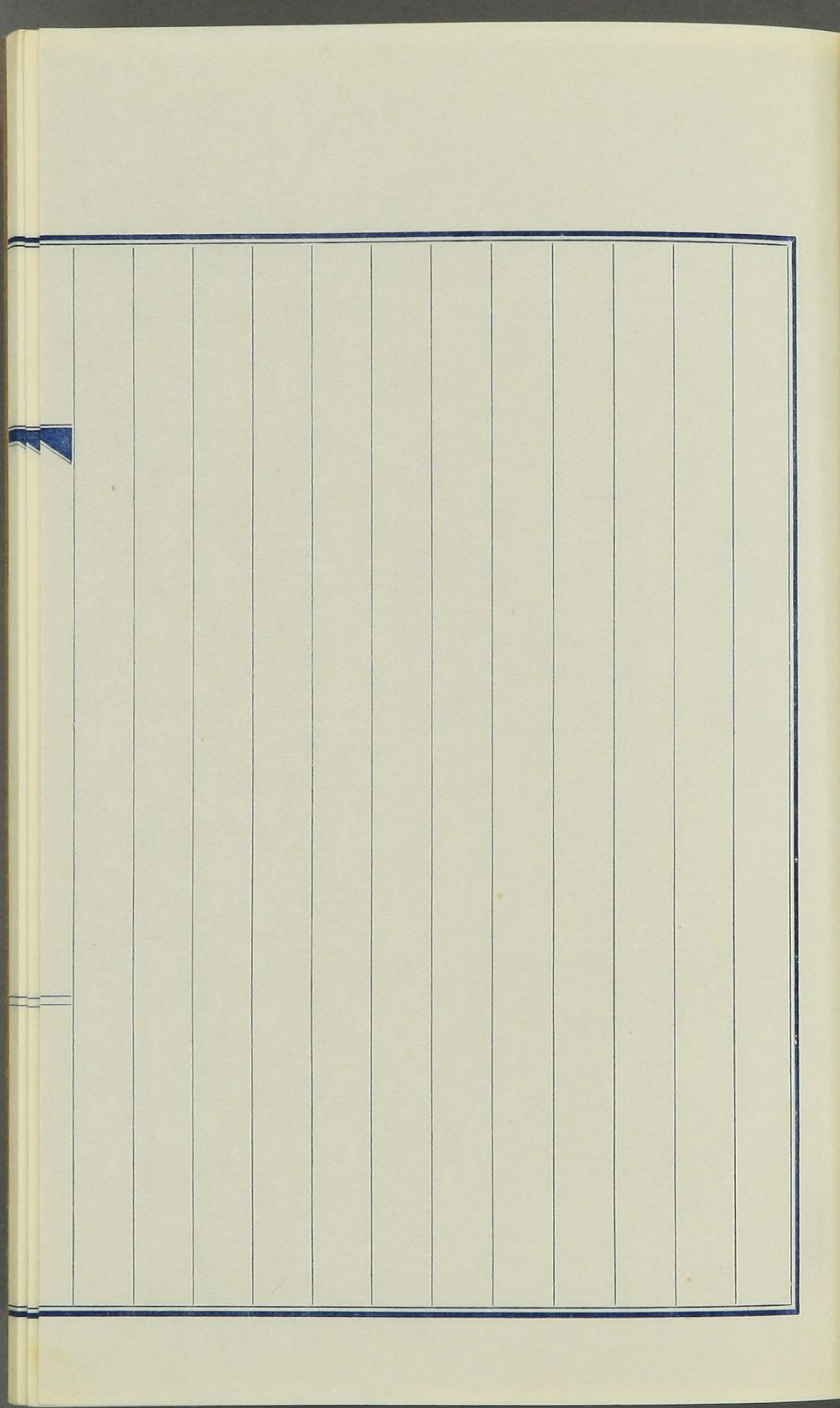
以上皆家將ニ

属す

○此の文の協定 席上ハ年々南アフリカのケールと
ウニと協定を勤め比今井直重を仰へて三時分
従う南阿聯邦の手帳を聴き歸る得る所が
あつた。アフリカと云くハ一概ニ是處の感えらる
の又思ふとあるが、ケールとウニは我の物の如き
溫和の氣味候ひ雪も降る事ある。自分から海
外へ這を入んたことあるは、但し喜望峯が
西の年、前、ウアスエド、カマヌ、兄弟ヤんたこと
を親の又思ひ、實の其他のこともあつた。此の聯
邦中のフランスワールは、ダイヤモントの産地が、
多量の炭を産する。此邦にもある。和書は
隆盛の代、其の支配下の被民地であつた

のが英回欲するにつけんとて、戦後英心の
キハンを脱せんとして獨立運動が盛んである。
既に現在九分通り獨立した態を呈してある。又
竟和黨系の人民が多数あるのを英回を煙
ふことが甚しい。英回欲がといふから英人さん
特別の取扱を受けし面倒を、上陸が出来る
とらうと誰の志願するが、実地は英人を
お断ら英人とあんなに上陸の手續が切つて面倒
である。此の聯邦ハロウンスワール、ラレンジフリ
ーステールト、ナタール、ケロー、フラフグード
ホープの諸島で、白人の五十七番人の六分の初等
階人十七番人が印も支那日本人五十五番人

が混血種族である。北島の花物、島の古い万鏡と
融字とをこのことをやつておれが、不便を感じて一千
九百十年に聯邦を形成した。さて首府を何
九の島とあり、新に各島皆巴が都を首府と
主張するのを、従つて三の首府を置き、主流行政
司法を三都に命令するものとして、個々の
予い世界の諸島とよきよめ、ナタールは英回人が
最も多いので、英本島の浦傳してナタールの首府
府を置くことを譲つたので、三島二三首府
が出来たのである。南の島皆、今日も英回人の
の任命する所であるが、既に獨立運動の熱
なるが、戻税をいふ英人と交渉するから



帳簿

以下
12 丁
白紙

